

日向纂記

自卷十三
至卷十

8
8
51

東 京 圖 書 館				
八	五	二	八	
冊	号	架	函	類

日向纂記卷十三目錄

平川分右衛門等日向洋ニテ危難ニ遭フ事	一	丁
佐土原瀬兵衛等深入シテ戦死ノ事	全	
稻津牛之助安井相右衛門カ策ヲ用ヒザル事	四	丁
稻津牛之助カ不覺ニテ佐土原勢ニ村角ヲ焼カル事	六	丁
安井相右衛門カ策佐土原勢ヲ破ル事	全	
安井相右衛門カ策再ヒ佐土原勢ヲ破ル事	八	丁
稻津牛之助等安井相右衛門等カ手柄ヲ嫉ム事	十一	丁
薩人内應伊東勢諸縣勢ヲ破リ續テ佐土原勢ヲ追撃ノ事	全	
稻津牛之助カ不覺ニテ味方敗北漫々橋六本槍ノ事	十五	丁
稻津牛之助カ同類忠義ノ徒ヲ稻津掃部助ニ讒スル事	十七	丁
島津勢曾井城ニ攻來ル伊東勢千町越ニテ防戦ノ事	十八	丁
安井相右衛門敵ノ内應ヲ得川越猪股兩士稻津掃部		

助ニ直諫ノ事 二十一丁
安井相右衛門等佐土原ニ燒働キノ事 二十三丁

日向纂記卷十四目錄

稻津掃部助宮崎城ヨリ清武城ニ移ル事 二十五丁
稻津牛之助カ同類忠義ノ徒ヲ陷ント謀ル事 全
矢野侃世稻津掃部助ヲ諫ル事 全
稻津掃部助穆佐ヲ攻ル事 二十七丁
飛松雅樂助田野衆ヲ頼テ篠原ニ寇スル事 二十八丁
矢野侃世屢稻津掃部助ヲ諫ル事 二十九丁
莊内櫛間合體シテ鯛取嶺ヨリ襲ヒ來ル事 全
矢野侃世國事ニ心ヲ盡セシ事 三十丁
矢野侃世安井相右衛門ニ託シテ敵情ヲ探ル事 三十三丁

稻津牛之助カ不覺ニテ佐土原勢ニ再ヒ村角ヲ燒ル、事 三十三丁
矢野侃世稻津牛之助ヲ打果サントセシ事 三十四丁
五人ノ士稻津牛之助ヲ誇ル事 三十五丁
薩人内應敵ノ軍議ヲ泄ス事 三十六丁
島津勢中村口ニ攻來ル事 三十八丁
穆佐城代川田大膳亮獨見ヲ陳ル事 三十九丁
黒田如水ノ答書飢肥ニ來ル事 四十丁
安井相右衛門病中間諜ニ出ル事 全
矢野侃世島津勢ヲ瓜生野口ニ破ル事 四十一丁
諸縣郡六外城ノ薩將東長寺ニ會議ノ事 四十三丁
川田大膳亮骸ノ上ニテ冤罪ヲ雪ントセシ事 四十五丁

日向纂記卷十五目錄

宮崎城ニ於テ諸士ヲ饗スル事

四十七丁

安井相右衛門尉敵ノ動靜ヲ探ル事

四十八丁

高岡勢宮崎城ニ攻來ル伊東勢柳瀬ニ逆寄シテ勝利

五十一丁

ヲ得ル事

穆佐勢細江ニ攻來ル六人ノ番衆引地ニ逆寄シテ勝

五十二丁

利ヲ得ル事

穆佐口引地ノ迫合優劣評判ノ事

五十四丁

報恩公大阪ニ於テ卒去ノ事

五十五丁

東禪公島津家ト和議ノ事

全

將軍家ノ命ニ因テ宮崎城ヲ高橋種統ニ反ス事

五十六丁

稻津掃部助黒田如水ノ指圖ヲ用サル事

五十七丁

稻津掃部助公廩ノ馬ヲ借ル附阿萬三平長倉三吉ヲ

五十八丁

殺ス事

稻津掃部助誅セラル、事

五十九丁

稻津掃部助ノ妻義烈ノ事

六十三丁

稻津因幡守飢肥ヲ去ル事

六十四丁

東禪公大阪ニ上ル黒田長政教訓ノ事

全

飢肥藩三タヒ檢地ノ事

六十五丁

稻津九郎兵衛飢肥ヲ去テ加藤清正ニ仕ル事

六十六丁

公子祐久京都小幡宗以カ家ニテ誕生ノ事

六十七丁

日向纂記卷十三

平川分右衛門等日向洋ニテ危難ニ遭フ事

報恩公ハ大阪ニテ病氣日ニ増加ハリケルニ十二歳ニ成シ世子祐慶ヲ

國許ニ下サレカトモ國許ノ事覺束ナクアリケルニヤ大阪ニ召具セ

ラレシ手勢ノ中ヨリ平川分右衛門尉荒武彦兵衛尉瓦林金右衛門尉等

以下百三十八人國許ニサシ下サル分右衛門尉等ハ十二端帆ノ船ニ乘

リ慶長五年十月七日大阪ヲ出帆シテ日州遠見灘ヲ乗通ル處ニ同月十

八日ノ曉天高橋右近大夫種統ノ軍勢宮崎ノ讐ヲ報ハント兼テ待設ケ

シニヤ兵船十七艘ニテ當家ノ船ヲ取圍ミ一人モ洩サシトヒシメキケ

ル延陵世鑑ヲ案スルニ高橋家ノ家老花田備後守宮崎ヲ攻落サレシト安カ

脚到來シテ高橋家モ關東降參ノ由ヲ告ケ來リケレハ備後守モ稻津退治ノ沙

汰ヲ止メ東海ノ港門ニ番船ヲ置イ東勢ノ上方ヨリ下ルヲ待ケルカ程ナシ伊

東家ノ船東海ノ洋ヲ通リケルヲ見カケテ急ニ番船ヲ乗カケ無體ニ港ニ潛入

レ兵船ヲ以テ取圍ミ已打取ントヒシコト見エタリ平川爲泉覺番ト符合セリ

分右衛門尉等之ヲ見テ敵船ハ數艘味方ハ一艘ナレハ驅引モ成カタシ

所詮智略ヲ以テ一時ノ難ヲ免シニ如シト評議シテ敵船ニ申スヤウ今
 度内府様關原御利運ニテ天下一統ニ歸シヌト雖トモ島津家ハカリハ
 未タ御手ニ屬セサルカ故ニ伊東相良秋月高橋此四家へ御先手仰付ラ
 ル、ノ聞互ニ申シ談シ相働クヘキ旨井伊兵部少輔直政ヨリ奉書持下
 リ候フトテ故モナキ偽書ヲ手ニ執テ高ラカニ讀聞セ早朝ヨリ黃昏マ
 テ高橋家ノ家來伊東與三右衛門ト互ニ使ヲ以テ應接スルヨト五度ニ
 及ヒケルカ後ニハ敵モ實トヤ思ヒケン船ヲ開テ通シケル斯テ二十日
 ノ未明折生迫ニ着船シケレハ早速分右衛門尉カ下知ヲ以テ加江田本
 郷七浦マテノ若者共ヲ集メケルニ暫時ノ間ニ二百餘人馳集リケレハ
 船中ノ人數合シテ三百餘人ニテ宮崎城ニ籠リケルニソ城兵モ是ニ力
 ナ得テ一入堅固ノ思ヲナセリ 平川爲泉覺 書日向記
 佐土原瀬兵衛等深入シテ戰死ノ事
 宮崎落城ノ後ハ稻津掃部助暫ク宮崎ニ在城ナレトモ程ナク清武ニ歸

リケレハ稻津牛之助 掃部助 在城ナリ同年十月九日牛之助下知ヲ以テ
 宮崎城ヨリ佐土原瀬兵衛尉木脇九兵衛鈴木平太郎伊勢太兵衛尉清水
 半右衛門尉山崎市之允 日向記市之允彌佐 或ハ市佐ニ作ル 樺山新之允稻津次兵衛尉八騎
 ナ頭トシテ一組二十人ツ、都合上下二百人ニテ木脇表へ出張ス其沙
 汰兼テ敵方ニ聞エケレハ木脇勢打集リ軍評定アリケルニ猿渡式部左
 衛門ト云フ者申シケルハ此度宮崎勢僅カ二百餘人ニテ寄來ル由ナリ
 然レハ味方ハ案内ノ地ト云ヒ殊ニ四方ノ勢ヲ只今一ツ貝ニテ集メン
 ニ凡ソ二千ニ及フヘシ此勢ヲ以テ三方ヨリ取包ミ打トラハ敵一人モ
 生テ還ル者ハアルマシト又本田豊前申スニハイヤ、其ハ餘リ強過タ
 ル手段ナリ稻津勝五郎 掃部助 幼名 ハ聞ユル敏キ男ナレハ僅ノ勢ヲ以テ此
 地マテ深入チハサセマシ是ハ定テ釣ノ兵ナルヘキニ此方ヨリ粗忽ニ
 勢ヲ出シ萬一彼勝五郎大勢ニテ自身押來リナハ本城ヲ伐取ラレンモ
 測リ難シ然レハ敵若此マテ押寄タラハ先ツ一應相支へ其後本城ニ引

入敵勢ノ繼クカ繼カサルカヲ見キリテ實ノ勝負ハ後ノ事ヨト云フ
諸人はニ同シテ口々ノ手分ヲセントヒシメク内ニハヤ味方ノ勢二百
餘人エイエイ聲ヲ揚テ攻カ、ルヲ見テ一支モセス蛛ノ子ヲ散スカ如
ク逃コモルヲ追付追付打程ニ木脇勢六七八人深手ヲ負ヒ詰リ詰リニ引
入ケル此勢ニ乘リ逸雄ノ若武者共ツ、イテ追ハント進メトモ流石ノ
小勢ナレハ敵ヲ追散シタルヲシホニシテ其ヨリ田間ニ出テ馬ヨリ下
リ兵糧馬飼ナントシテ田ノ中ノコヅミコツミニ寄カ、リ暫ク息ヲツキ
居タル處ニ敵ハ此油斷ヲ窺ヒ且宮崎ヨリ繼ク味方ノナキコトヲ見キ
リテ東長寺ヨリ横合ニ出テ味方ノ歸ル路ヲ取截リ籠ノ鳥ノ如クニシ
テ一人モ洩サス打取ントヒシメキ合ヘリ時ニ大寺備前入道ト云フ者
老功ナレハ思案シテ云フ只今敵ノ後ヲ取截タラハ敵ハ免レサル所ト
知リ殊ニ伊東勢ノ癖トシテ必死トナリ二百餘人ノ者眞丸ニ堅マリ切
拔ニ味方誰アリテ其鋒ヲ打トメ申サンヤ却テ味方太半ソコチ申ス

ヘシ然レハ只何トナク後ヲ取截ル企テアリト云ハセタランニハ多分
取截サル内ニ引取ント周章ヌルコトモアルヘシ敵ノサナリニ因テ後
ヨリツメカケツメカケ射テ落シ反シ合セハ夾ンテ打取ニ如シトテ
即チ百五十人ヲ以テ東長寺ヨリ後ヲ取截セ伏兵トシ残り四百餘人ヲ
三備ニナシテ先ニハ弓鐵砲ヲタテ何トナク後ヲ取截リ打取ントスル
由ヲ言セケレハ味方計トハ知ス後ヲ取截レテハ大事ナリトテ八騎ノ
士馬牽ヨセヒタヒタト打乘リ田間ヲ横筋違ヒニ驅渡リ脇道ヨリ引取
ントシタリケルカ此處究竟ノ深田ニテ鎧スリ胸ガヒツクシマテ打入
テ人馬共ニ少モ働キ得ス敵ハ之ヲ見テ得タリ賢ント射手ヲソロヘ指
ツメ挽ツメ射ケル程ニ矢庭ニ八騎共射落サレ其外足輕雜兵マテニ打
死二十四人手負十一人ニ及ヘリ此時味方一人モ免ルマシク見エタル
カ海老原助之丞猪股又左衛門尉後藤十郎右衛門尉赤目權之丞甲斐重
右衛門尉等所々ニテ踏止リ槍ヲ合スルト雖モ敵猶大勢競ヒ來ル中ニ

モ綾ノ組頭二方舍人ト云フ者眞先ニ進ミ來ルヲ稻津兵助取テ反シ只
 一槍ニ衝殺シケレハ敵之ヲ見ルト齊ク殘ヲス引取シユエニ大勢ノ味
 方虎口ノ難ヲ免レ這々宮崎ニ逃歸ル淺猿カリケル事共ナリ宮崎軍記
日向記
 評ニ曰ク若大寺備前入道カ云ヒシ如ク二百ノ味方必死トナリ一組
 六十人ツ、百八十人ヲ三手ニ作り外二十人ヲ助勢トシ本道筋ヲ繰
 引ニシサテ後ヲ取截タル横合ノ敵頭ヲ見テ六十人ツ、ノ二組面モ
 フラス突ト突テカ、リナハ陰虛陽盛ノ理ニ當ツテ敵居負シテ敗セ
 シコト十二九ツナリ残り六十人ノ一組ハ追來ル敵近ツキナハ二十
 人ノ助勢ヲ道ノ左右勝手好備へ敵ヲ横筋カヒニ空矢ナク打セナハ
 是亦頼ミ切タル伏兵ノ打レタルヲ見テ皆敗スへシ仔細ハ稻津兵助
 カ二方舍人一人ヲ槍ツケテサへ皆取テカへシ逃タル敵ナレハ況ン
 ヤ右ノ如ク軍ノ實法ヲ以テ九死一生ノ戰ヒナサンニ薩軍爭テカ
 コラユヘケンヤ然ラハ必死ヲ出テ必生ニ逢ハンコト疑ヒナシ縱皆

打死ストモ高名ノ死ト云フヘシ若又敵ヲ追拂ヒ活テ歸リナハ武士
 ノ手柄比類ナキ働キナルヘシ右八騎ノ士深ク敵地ニ入テ後引取ノ
 殿ト云フ法ヲ一人モ知サルコト時ノ恥辱後代マテノ惡名ナリ武士
 ノ武道ニウツキ程世ニ口惜キモノハナシト古人ノ語思ヒ知ラレタ
 リ此評宮崎軍記ニ載ス蓋シ安井七
郎右衛門朝宜ノ録スル所ナリ
 稻津牛之助安井相右衛門カ策ヲ用ヒサル事

安井相右衛門尉朝秀ハ稻津牛之助ニ屬シテ宮崎城ヲ守リケルカ慶長
 五年十月十日ノ晚佐土原表ノサナリヲ聞合セ其ヨリ直ニ本莊ニ往キ
 木脇邊ヲカギ廻リ宮崎城ニ歸テ牛之助ニ告テ申シケルハ佐土原ト本
 莊木脇邊ノ風説ヲ承リ候フニ高岡穆佐倉岡綾東長寺ノ勢ト佐土原ト
 約束ヲ定テ相互ニ宮崎城ヲ乘取ヘシトノ計略ナリ其計略ハ宮崎ヨリ
 木脇口爪生野邊ニ出張候ハ、其透間ヲ見テ佐土原ヨリ宮崎へ押寄せ
 難ナク城ヲ乘取ルヘシ宮崎ヨリ佐土原ヘカ、ラハ本莊倉岡ヨリ宮崎

ヲ乗取ヘシ若清武ヨリ人數ヲ出サハ高岡ヨリ清武ニ相働クヘシ又田
 野ヨリ加勢ニ出ハ穆佐ヨリ出テ搦ムヘシトナリ是ハ慥ナルコトノ由
 ニ候ヘハ其御覺悟肝要ニ存シ候殊更今日佐土原瀬兵衛始メ木脇口ノ
 打死ニテ味方甚々氣後レニ相成候ヘハ先ツ此後レタル氣ヲ取直シ申
 サシコト專一ニ候敵ハ勝ニ乘リ明日ニモ押來ルヤウスニ相見エ候早
 速其用意ヲササレヨト牛之助聞モアヘス以テノ外氣色ヲ損シ昨日原
コハ今日トアリ然トモ木脇口ノ取ハ九日ナリ此ハ十ノ戰ハ味方後レテ取
日ノ評議ナレハ今慮度ヲ以テ之ヲ改ム下文モ亦同シタル様ナレトモ其ハ武道不穿鑿ノ云ヒ分ナリ常々掃部助カ槍鋒尖リ
 タレハコソ僅カ二百ニ足サル人數ヲ以テ輒ク敵ヲ追コメ面々手柄ヲ
 モ仕リタルナレ勝軍シテ後ニ不慮ノ計ニ陥リ打死スルハ士ノ本望ナ
 リサレハ軍ト博奕トニ不斷勝コトハカリハ無モノナリ島津家ノ者共
 武勇ニテハ協ハサル故ニ鄙怯ナルタマカリコトニ三四十人打取タル
 ナ比類ナキ高名ノヤウニ罵リ廻ルナリ其ヲ鼻ニアテ、若モ明日此城

下近邊マテ寄來ラハ是コソ夏ノ虫ノ飛テ火ニ入ト云フモノナリ掃部
 助カ弟牛之助此城ニ在番スルコトハ兼テ隠レハアルマシ何トシテ此
 近郷マテ寄來ルヘキヤ今日無念ノ槍ハ明日衝ヘキ場ナレハ明日ハ味
 方大勢木脇へ出張シテ快ク無念ヲ晴サント云ヒステ、其座ヲトウト
 ウト立ケル相右衛門ハ當座ニ面目ヲ失ヒ是ヨリ老武者ナレハ直ニ成
 合丹後入道カ陣屋ニ往テ爾々ノ由ヲ語ルニ入道乃チ中村清左衛門入
 道ヲ招キ談合ノ上三人同道シテ川崎大膳亮ノ陣屋ニ詣ル折節長倉織
 部正堤五左衛門尉會合アリテ軍評定ノ最中ナルカ三人カ參リタルヲ
 喜ヒ奥ノ間ニ招キ入ラル、ニソ敵方ノ風聞委曲ニ申シ達ス即チ稻津
 九郎兵衛尉東次郎兵衛尉ヲ呼ヨセ評議紛々タリ九郎兵衛申レケルハ
 牛之助若氣ノ至リニテ言語道斷ノ舉動ナリ相右衛門料簡ノ通り明日
 瓜生野木脇へ出張ノ義ハ必ス無用タルヘシ城ヲ取レサル工夫第一ナ
 リト一決シテ其趣牛之助ニ申シ入ル、ト雖モ牛之助曾テ聞入ス差當

リタル無念ノ槍ヲステ置キ未タ見エ來ラサル敵ヲ防ントノ覺悟ハ臆
 病ノ至ナリ掃部助カ歸リ聞ン所モアリ又飢肥表ノ評判モ恥カシト申
 シケル處ニ清武ノ掃部助ヨリ使來リテ云フ昨日原書ニハ今穆佐ヨリ
 川田大膳亮本書川田太郎左衛門ニ作ル今島津家記ヲ參考シ且ツ之ヲ薩人
 質スニ慶長中穆佐地頭タル者大膳亮ニシテ太郎左衛門ニ非
 ス蓋シ宮崎軍記ヲ編ム者島津家ニ平田太郎左衛門アルヲ見テ川田カ事トシ
 其二人ナルヲ知ラサルナリ按スルニ大膳亮ハ慶長四年巳亥ヨリ元和六年庚
 申マテ二十二年大將ニテ五百餘人の野マテ寄來ルニ因テ細江ヨリ田野
 程佐地頭タリ

勢打テ出テ花立越ノ切所ニ支ヘ相戦ヒケルカ押川與三右衛門尉打死
 シ楠原喜右衛門尉川越次郎右衛門尉深手ヲ負ヒ田野勢總敗軍タルヘ
 キ處ニ南波與右衛門尉阪中ニ相支ヘ眞先ニ進ミ來ル敵ノ足輕大將ヲ
 種カ島ノ大筒ニテ打留ケル手柄ニ因テ味方不慮ニ運ヲ開キ候其元ノ儀
 モ木脇口ニテ打死多キ由ニ候フ間敵方ニ出張ノ義ハ無用タルヘシ能
 々カギ物聞ヲカケ敵ノ様子ヲ探リ老名シキ働キ肝要ナリト申シ來リ
 ケレハ瓜生野口出張ノ義ハ延引トナリケル同上

稻津牛之助カ不覺ニテ佐土原勢ニ村角ヲ燒カル、事

稻津牛之助ハ兄掃部助カ戒メニ因テ瓜生野口出張ノ義ハ延引トナリ
 シカトモ明日佐土原ヨリ寄來ルヘキハ安井相右衛門尉カ虚説ナリト
 テ何ノ用意モナク夜已ニ深ケレハ面々陣屋ニ歸リケル川崎大膳亮長
 倉織部正兩大將ハ一入心ニカ、リタル體ニテ道スカラ相右衛門カ袖
 ヲ控ヘカマヘテ何事モ心ニ衝ムコトナク只々主君ノ御爲ヲ存シ明日
 モ佐土原表ノサナリヲ能々カギ候フテ何ソ變リシユトアラハ早ク告
 知セヨトテ別レケレハ早ヤ一番鳥鳴ケル相右衛門ハ目ヲモ合セス夜
 ノ明ルヲ待兼十月十一日ノ未明ニ新名瓜廣原邊ヲカキ廻リケル處ニ
 日ノ出時分ハヤ上那珂ヨリ下那珂ニカケテ敵勢一簇一簇打出ルテイ
 ニ見エタリ知音ノ者ニ尋テモ其辭少モ違ハサレハ其マ、走リ歸リ
 只今佐土原勢別府邊ニ出張シテ家燒ナト仕ルテイニ見受候御覺悟然
 ルヘシト披露スレトモ城中ニハ聞入ル、人モナク左モ候ハン歟トド

ヨメキ合ヘルハカリナリ案ノ如ク敵勢三百餘人村角邊ニ出張シテ思
フマ、ニ村里ヲ放火シ鬨ヲ三度マテアケ榜示ヨリ下那珂久峯ニカ、
リ徐々ト引取ケル宮崎城ニハ手過カ又ハ敵ノ忍ヒ來リテ放火スルカ
先ツ人ヲ出シテ見スヘシナト云フ内ニ鬨ノ聲ヲ聞テヤレ敵ノヨセタ
ルソト上ヲ下ヘト騒ケトモ詮ナシ眼前ニ城下ノ村ヲ燒セ矢ノ一ツヲ
モ射カケヌコト無念ト云フモ限リナシ同上

安井相右衛門カ策佐土原勢ヲ破ル事

宮崎城ニハ佐土原勢ニ城下ノ村ヲ燒レ無念ナルコト限リナシ此全ク
稻津牛之助カ不覺ニテ安井相右衛門尉カ言ヲ用ヒサル故ナリト心ア
ル輩ハ爪彈キシテ惡ミケル相右衛門尉ハ少モ憤ルコトナク十月十一
日佐土原勢ノ引取シ後ニツイテ敵方ニ忍ヒ入り敵ノ様子ヲ探リ聞ク
ニ此コ彼コニ五人七人ツ、思ヒ思ヒニ寄集リ評判シケルハ伊東勢木、
脇ノ後レヨリ頭ヲ出スコト能ハス今日城下ノ村ヲ燒レナカラ追矢ノ

一ツヲモ得射出タサズ臆病神ニ牽レ腰ヌケナル敵ナレハ明日又彼邊
相働キ二三度モ脅スモノナラハ宮崎ヲハ已レトステ、下城スヘキハ
必定ナレハ明十二日ニハ十六以上五十以下ノ者百姓町人マテ面々得
タル道具ヲ以テ平良表ニ差揃ヒ合圖ヲ違ヘス印々ノ所ニ集リ候ヘト
ノ御觸ナリトテ老弱男女サ、メキヲタル是ニ由テ知音ノ岩切道秀所
ヘ忍ヒ入り對面シテ問ヒケレハ明十二日ニハ西ハ都於郡南ハ兩那珂
北ハ新田海手ハ富田德淵ヲ限リ廻船百姓町人マテ五十以下十六以上
ヲ十二組ト立テ一組百人ツ、都合千二百人ノ着到ヲ以テ宮崎城ヲ乘
取ヘントノ觸ツケナリト語ルヲ聞テ其マ、ニ相別レ飛カ如ク宮崎ニ
馳歸リ其趣ヲ川崎大膳亮長倉織部正兩人ニ申シ入ケレハ兩將大ニ喜
ヒ早速海老原助之丞平川傳右衛門尉ヲ招寄セ相右衛門申ス如ク若明
日佐土原ヨリ大勢寄來リテ慮外ノ働キナト仕リ味方敗北スル時ハ油
斷ノ上ノ恥辱ナリ近頃城中ノ諸勢ハダ、ナレハ六船頭ニ異ナラス

繫馬ニ鞭ツカ如シ主君ノ爲ト云ヒ後代ノ名聞ナレハ明日ノ義ハ兎モ
角モ各軍法次第ニ頼ミ入ナリ我々兩人ハ隨分粉骨ヲ盡シ敵城外ニ寄
來ラハ花ヤカニ軍シテ城ヲ取ラレ申スマシケレハ心安ク相働カレヨ
ト申シケル内ニ夜ハホノノト明タリ其ヨリ傳右衛門尉助之丞相右衛
門尉三人談合レテ有水伴太弓削四右衛門尉阿萬丞兵衛門尉川崎有右
衛門尉杉田助之允谷口文右衛門尉崎田助左衛門尉平井八郎右衛門尉
等ヲ始メ雜兵共ニ四十七人ヲ十六人ツ、三組ニシテ此コ彼コニ驅廻
リ村里ノ老人共ニ下知シテ今日清武紫波洲崎兩所ヨリ二千餘人宮崎
ノ後詰ニ來ル由テ敵方ニ告知セヨト教ヘ置キ其ヨリ船塚山ノ陰三個
所ニ伏シテ横合ニ突崩サント潮合ヲ相待ケル處ニ辰下刻ニ及ンテ佐
土原勢七八百人ハカリ出張シテ下別府ヲ燒拂ヒ此ヨリ手々ニ分レテ
宮崎城下マテ押寄來ル城中是ニ驚キ騒ヒテ田中壹岐椽主從三人宇田
津甲斐介壹岐平兵衛尉海老原平八日高仙右衛門尉打テ出テ防キ戰フ

ト雖モ大勢ノ中ニ取コメラレ七人共ニヤミノト打レメ城代ノ牛之
助此體ヲ見テ案ニ相違シ只茫然トシテ息ツキ居タリ大膳亮織部正始
メ大將分ノ人々ハ神妙ニ下知シテ口々ヲ固メケル此時敵若一時ニ詰
カケナハ攻落サル、ユトモアルヘキニ兼テ郷民共ニ教ヘ置シ如ク清
武紫波洲崎ヨリ大勢後詰アルヨシヲ聞テ心元ナク思ヒケル處ニ城中
鎮リカヘツテ音モセサレハサテヨソ後詰アルニ疑ヒナシ長居シテ大
勢ニ取包マレテハ惡カリナン去來引取ント旗頭ヲ立直サントスル時
船塚山ニ伏レタル相右衛門尉助之丞傳右衛門尉此三組時分ハ好ソ立
アカレトテ鬨ヲ突トアケ打テカ、ル佐土原勢是ニ仰天シテ我先ニト
引カヘシ逸足ニ逃行ヲ追付追付打程ニ名アル敵六人雜兵九人打取リ
味方不思議ノ勝トナリタルハ皆相右衛門尉助之丞傳右衛門尉三人ノ
忠節ナリトテ掃部助寢所ニ呼入密々褒美アリ其後諸縣佐土原兩旗ニ
テ宮崎ヲ乘取ント企ル由聞エケレハ頓テ掃部助宮崎ニ在城アリテ清

武ニハ矢野侃世城代ナリ宮崎軍記

安井相右衛門カ策再ヒ佐土原勢ヲ破ル事

安井相右衛門尉ハ慶長五年十月十四日十五日兩日ハ佐土原綾本莊木脇八代倉岡邊處々カギ廻リケルニ佐土原ト諸縣ト兼テノ約束首尾不
合ノ事トモ出來シテ佐土原ヨリ度々ヌケカケシテ宮崎城下マテ押寄
少々家焼ナトハシタレトモ却テ追撃セラレ敵ニ勢ヲ付シユト覺島ニ
相聞エナハ沙汰ノ限り御折檻タルヘシ新納式部殿北郷安藝守殿ヨリ
モ諸縣諸外城ノ衆ト佐土原殿ト能々合體シテ宮崎ヲ攻潰スヘト申
來ル其ニ付今月二十日頃ニハ佐土原諸縣兩勢ニテ是非宮崎ヲ攻潰ス
ヘシト風聞シケルヲ慥ニ聞届ケ十五日ノ晚戌刻宮崎ニ歸リ其趣ヲ申
シ達シケル處ニ岩切道秀カ弟源八左衛門相右衛門方ニ參リテ申レケ
ルハ兼テ今月二十日頃諸縣ト佐土原ト結ヒ候テ宮崎ニ出張ノ約束ニ
候ヘトモ諸縣郡ノ外城衆ハ皆々頭ナシノ集リ勢ナリ佐土原ハ一郡一

城ノ主トシテ度々敵ノ城邊マテ押寄候ヘトモサセル手柄モナケレハ
覺島ノ聞エモ何如ナリ幸ニ今宮崎城兵清武ニ宿歸リノ留守ニテ小勢
ノ由ナレハ此虛ニ乘シテ明日急速ニ押寄攻潰サントテ俄ニ城下近邊
ノ村々マテ悉ク御立申候御用心候ヘト悉ニ申聞セ即テ源八左衛門ハ
罷歸リヌ相右衛門早速其趣ヲ川崎大膳亮長倉織部正稻津九郎兵衛尉
三人ニ申シ通シケルニ三人即テ相右衛門尉ヲ同道シテ掃部助ノ前ニ
出テ相右衛門カ申ス所是マテ少モ違フコトナシ明日ノ義モ必定相違
アルマシト申レケレハ掃部助ウナツキ叔明日ノ軍法ハ如何シテ
然ルヘキヤ相右衛門内存ノ程包マス申セトナリ相右衛門申シケルハ
斯様ニ火急ノ時ハ敵モ味方モ深々シキ軍法ハ整ヒ難キモノニテ候敵
ハ味方ノ油斷ト小勢ト此二ツヲ待ミ何ノ行列作法ト申スヲモナク只
急速ニ押來ルヲ上策ト仕ルマテニテ候ハンナレハ味方ハ其意ヲ引受
究竟ノ勇士六十人ヲ選テ三組ニ分シ是ニ頭十二人ヲ定メ一組二十人ニ

頭四人ツ、相加ヘテ新名爪ノヨキ坪々三个所ニ伏シテ時分ヲ見合セ
三方ヨリ突ト打テ出テ候ハ、敵ヲ輒ク打亡シ申スヘキカト存シ候彼
所ノ地形ハ兼テ内々心カケ某能存知候ヘハ御案内申スヘシ各様御存
ノ通り朝鮮陣中ニテモ大利ヲ得候フコトハ皆伏兵ノ出シヤウニテハ
候ハスヤ然トモ味方小勢ニ候ヘハ敵モリカヘシ申スコトモ有ヘク候
其御用心ハ各様御格護ニアルヘシト掃部助大ニ悦ヒ尻餅ツイテ各何
如何如ト申シケル三人ノ衆モ聲ヲソロヘテ是ハ時ニ取テ日本一ノ軍
法ナリ早々手賦リセヨトテ早速平島半左衛門尉堤内新兵衛尉猪股又
左衛門尉借屋原彌左衛門尉四人ヲ一組ノ頭トシテ小田原總右衛門尉
矢留新左衛門尉岩切與四右衛門尉以下二十人ヲ一番伏トス又今村治
部左衛門尉平川傳右衛門尉黒木將監長友大炊介四人ヲ一組トシテ弓
削與三加藤七左衛門尉長田伊賀以下二十人ヲ二番伏トス又濱田十右
衛門尉岩切右馬助別府小兵衛尉松葉又左衛門尉

前篇宮崎ノ役ニ松葉又
兵衛アリ此恐クハ彼ト

一人ナラソ然トモ今据テ考フル所
ナシ姑ク原本ニ從フ下文亦同シ 四人ヲ一組ノ頭トシテ成合太郎五郎
結城甚七矢野相馬以下二十人ヲ三番伏ト定メ都合七十二人十六日ノ
未明ニ宮崎ヲ出テ新名爪ニ差出テ相右衛門尉案内ニテ好坪々三个所ニ
伏シテ今ヤ晚シト待居タリ相右衛門尉ハ其ヨリ廣原堂ノ尾ニ忍ヒ行
敵ノ様子ヲ遠見スル處ニ卯下刻ニハヤ人數六七百程我先ニト抑立來
ル體ナリ扱コソ案ニ相違ナシト嘻ク思ヒ足早ニ中ノ道ヲ忍ヒヌケ新
名爪ニ還リ來リ敵ノヤウスヲ云ヒ聞セ槍ブスマヲ作ツテ待居タル處
ニ間モナク敵頭三番伏ノ處ニ來ル伏兵共己ニ突テ出ントスルヲ相右
衛門尉二度マテ押留メ兎角スル内ニ敵ノ先勢百七八十人モ通り過ル
ト思フ處ニ一番伏ノ人々起リ立闘テアケテ敵ノ真先ニ進ミ來ル鐵砲
ノ者ヲ真向ヨリ二三人突倒ス敵シト口足ヲ踏テ漂フ處ニ二番伏ノ兵
又々横合ヨリ衝テカ、ル敵ハ思ヒ寄サユコトナレハ太刀拔コトヲモ
打忘レ友崩レニナリ後ヨリ我先ニ引ントス之ヲ見テ敵ノ大將酒勾源

三郎半成九郎次郎伊集院熊太郎ナト若武者ナレハ大音アケテ敵ハ小勢ナルソ蓬心カヘセ逃ル奴原ハ一々斬テ棄ルツトイナリ廻テ手元ニ逃來ル下郎二人ヲ衝殺シ馬ヲ蹴立テ、モリカヘス已ニ危ク見エシ處ニ相右衛門尉下知ヲ加ヘ時分ハ好ソ起立ヨトテ三番伏一度ニドツト突テカ、ル之ヲ見テ一番二番ノ勢一ツニナリ闘テ作リテ突廻リケレハ新手ノ大勢來ルヤウニ見エタリ源三郎九郎次郎熊太郎三人モ此勢ニ僻易シ協ハントヤ思ヒケン捨鞭打テ引カヘス大將此ノ如クナレハ一人モ蹈止ル者ナク右往左往ニ逃行ヲ追付攻付ウツ程ニ三十八人打取ケル血氣盛ノ者共猶モ追ハントス、メトモ敵ハ大勢味方ハ僅ニ七十二人殊ニ敵地ノコトナレハ長追シテハ惡シカリナントテ足早ニ宮崎ニ引取ケル掃部助ヲ始メ今日ノ高名比類ナキ手柄ナリト感セヌ者ハナカリケリ夜ニ入テ掃部助ハ相右衛門尉一人ヲ寢所ニ呼入、酒并ニ銀錢ナト與ヘテ今日ノ高名ヲ賞シケル且又岩切源八左衛門ヘトテ銀

錢五十文ヲ授ケ種々懇ナル口上ナリ相右衛門尉即テ佐土原ニ忍ヒ行具ニ申シ達シ銀錢相渡シケレハ源八左衛門道秀兄弟喜ヒ斜ナラス上

稻津牛之助等安井相右衛門等カ手柄ヲ嫉ム事

安井相右衛門尉等ハ七十二人ノ小勢ヲ以テ佐土原勢ヲ打破リケルヲ比類ナキ高名ナリト風評一入高カリケルカ人ノ手柄ヲ嫉ミ人ノ美名ヲ羨ムハ庸人ノ癖ニテ今モ昔モ變ラヌコトナレハ稻津牛之助ヲ始メ是ニ一味ノ若者共打寄打寄評判シケルハ此度七十二人ノ者共軍ニハ勝タレトモ餘リニ敵ヲ奥深ク思ヒ僅カ三十八人逃首ヲ斬タルハ左ノミ手柄トハ云ヒ難シ今十町モ追、タラハ殘ル敵ハアルマシキニ惜ラ命ヲ繼セテ安々と反シツルモノ哉ト口ヲ極メテ惡口ス掃部助之ヲ聞テ以テノ外腹ヲ立テ七八百人ノ大敵ニ僅カ七十餘人ノ小勢殊ニ味方ヲ離レ敵地ニ入テ大敵ヲ追崩スノミナラス三十八人打取タルハ實ニ是鬼神ノ舉動トモ云フヘキナリ今七八町モ追タラハ精ツキ力タユムヘ

シ此時敵モシ續ク味方ナキヲ見キリテ總反シニシテ戰ハ、一人モ生
テ歸ル者ハアルマシ然ル時ハ比類ナキ手柄ナキノミニ非ス味方大ナ
ル弱ミトナリ後日ノ戰ナリカタカルヘシ斯様ナル武道ヲ知、又小鳥共
カ集リテ驚ヲサミスル譬ナリ重テ沙汰スル輩アラハ嚴ク詮議ニ及フ
ヘシト申シケレハ此評判ハ止ヌレトモ牛之助ハ棟梁ナル故ニ密々惡
口シケルトナリ同上

薩人内應伊東勢諸縣勢ヲ破リ續テ佐土原勢ヲ追撃ノ事

慶長五年十月十六日ノ夜八代ノ粗木藤七兵衛ノ子藤八密ニ來テ安井
右衛門尉ニ申聞ケル趣ハ昨十五日ノ晚覺島ヨリ島津又次郎殿出張
アリテ下知アリケルハ兼テ佐土原ト諸縣ト兩旗ニテ宮崎ヲ攻潰スヘ
キ約定ナルニ佐土原ヨリ度々ヌケカケシテ敗レテ取リ却テ敵ニ勢ヲ
ツケタル由覺島ニ聞エ若屋形様義弘殊ノ外立腹アリ今ヨリ後諸縣諸
外城ト佐土原ト能々合體シテ宮崎ヲ攻取ユト肝要ナリトテ又次郎殿

ハ直ニ佐土原ニ御通り候多分今月二十日頃ニハ瓜生野新名爪兩口ヨ
リ大勢其許ニ差出申スヘキカト推量仕リ候間用心候ヘトナリ相右衛
門即チ其趣ヲ掃部助ニ通レケレハ掃部助喜ヒ銀錢二十文ヲ授ケ、ル
ユエ相右衛門其儘藤八ニ相渡シ厚ク一禮ヲ陳酒飯ナトヨキニ饗シ歸
シケル其迹ニ又佐土原ノ岩切道秀ヨリ弟源八左衛門ヲ以テ今月十八
日諸縣ト此方ト結ヒ候テ其地ニ發向シ其城ヲ三方ヨリ總乘ニシテ只
一度ニ攻落スヘシトノ積リニテ候是ハ覺島ヨリ島津又次郎殿參ラレ
候テノ下知ニテ候内々ハ二十日トコレアリ候ヘトモワザト引寄十八
日トノ事ニ候隨分御用心候ヘト云捨ニシテ源八左衛門ハ早速罷歸リ
又時ニ夜モ已ニ深テ早一番鳥鳴ケレトモ斯ル大事ヲ暫時モステ置ヘ
キニ非ストテ川崎大膳亮ノ寢所ニ參リ爾々ノ由申シ達シケレハ大膳
亮即チ相右衛門尉同道ニテ掃部助陣屋ニ參リ右ノ趣申シ達ス掃部助
大ニ喜ヒ早速鐵漿衆奈須八郎兵衛尉中村八兵衛尉川越島右衛門尉ヲ

呼テ下知シケレハ是マテ清武へ宿歸リノ衆一人モ殘ラス明十七日ノ夜ニ紛レ如何ニモ忍ヒ忍ヒニテ宮崎城ニ入候フヤウニト御サセケル其ヨリ又長倉織部正稻津九郎兵衛尉伊集院源右衛門尉東次郎兵衛尉ナトヲ招キヨセ軍ノ評議區々ナリ次郎兵衛尉申シケルハ兎角此度覺島ヨリ島津又次郎出張シテ下知ヲ加ル上ハ是マテト違ヒ能一致シテ攻來ルヘケレハ城中支ヘ難キコトモアルヘシ所詮中途ニ出合ヒ有無ノ一戰ヲ遂ケ其最中ニ掃部助殿打テ出テラレナハ十五ツ六ツハ味方勝軍タルヘシ時ニ九郎兵衛尉申シケルハ如何ニモ此度ハ中途ニ出張シ有無ノ一戰ヲ仕ルヘキ圖ニテ候フ然トモ敵ハ三手ニ分レテ攻來ル由ナレハ若戰ヒノ最中ニ掃部助殿打テ出ラレシテ見テ敵ノ一手滿願寺口ヨリ押入ナハ何ノ造作モナク此城ハ敵ノ物トナリ候ハン掃部助熟々ト之ヲ聞テ兩人ノ内略何レモ一理アリ相右衛門ハ何如存シ候フヤ遠慮ナク申セトナリ相右衛門尉申シケルハ此度敵ハ大勢ノ力ヲ

恃ミ味方ノ小勢ナルヲ侮リ三方ヨリ一時ニ攻落サント手ニ取ヤウニ思フハ必定ナリ味方モ清武宿歸リ來ラハ人數ハ不足仕ラシ此勢ヲ三ツニ分テ三カ二ハ瓜生野口ニ出張シ敵ノ思ヒモ寄サル所ヲ突崩サハ敵ハ案ニ相違シテ敗北センコト疑ヒナシサテ又三カ一ノ勢ヲ二ツニ分テ一手ハ新名瓜ノ搦手ヲ防クヘシ一手ハ滿願寺口ヲ大事トシテ城中ニ籠ルヘシ瓜生野口へ出張ノ勢モ敵ヲサヘ追散シナハ早速宮崎城ニ馳歸リ奈古山ニ旗ヲ豎テ追々人數シクラムナラハ尼遠ノ敵皆々瓜生野ノ勢ニ逃加ルヘキハ必定タルヘキヤト掃部助ヲ始メ一座ノ人々皆尤ナリト同シケレハ早速手分ヲ定ム先ツ一番瓜生野口出張ノ大將ニハ川崎大膳亮稻津九郎兵衛尉長倉織部正東次郎兵衛尉堤五左衛門尉稻用孫兵衛尉伊集院源左衛門尉成合吉右衛門尉老功ニハ成合丹後入道中村清左衛門入道ヲ相副弓削勤七長田伊賀介外山三郎日野源左衛門尉梁瀬源兵衛尉崎田助左衛門尉借屋原甚作以下都合七百六十餘人

ナリ新名爪搦手ノ請手ニハ稻津牛之助平川分右衛門尉平部長右衛門尉落合淺之助右衛門尉田中四郎左衛門尉川崎七右衛門尉等ヲ大將トシテ功者ニハ齊藤仁右衛門此人ハ元來宮崎ヨリ降參ノ人ニテ宮崎ノ案内者ナリ海老原助之允川越左衛門尉田爪又左衛門尉槐島加兵衛尉落合市兵衛尉岩切角左衛門尉米良與兵衛尉阿萬五郎兵衛尉猪股又左衛門尉小山田清右衛門尉小田原總右衛門尉以下二百五十餘人搦手口ニ控エタリ城中ニハ掃部助手廻リノ衆五十人二十人衆一組鐵漿衆十人都合八十餘人ニテ固メタリ清武城ニハ矢野侃世上下六十人ニテ手固ク相守ル田野勢ハ穆佐ノ敵ヲ固ク支ヘヨトナリ斯ノ如ク手分モ定リケレハ早申下刻ニナリ又掃部助ハ尙モ敵ノ様子ヲ探ントテ相右衛門尉ニカキ物聞テ命シケレハ相右衛門尉ハ命ヲウケ奈古山ヨリ上那珂ニ出テ夜ニ入テ佐土原ニ至リ其所彼所カキ廻リケレハ早ヤ亥刻ハカリニ成ヌ其ヨリ岩切道秀ニ逢テ承ハレハ明十八日ニハ先瓜

生野口へ諸縣衆大勢差出候ハ、宮崎ヨリ過半彼地へ出張スヘシ宮崎モ折節無勢ノ由ナレハ防キ戰フト雖モ終ニハ敗軍スヘシ後ヨリ透間モナク追カケ城ニ逃入ントスル時尼達新名爪兩口ノ勢一度ニ攻寄三方ヨリ揉合セ詰登ラハ輒ク城ハ落ヘシ是ニ由テ先瓜生野口ヲ大手ノ寄手ト定メ日中ニ押寄ヘシ然ラハ新名爪ハ搦手ト成リ後ヨリ城ニツクヘシ尼達ノ勢ハ大手搦手ノ行司ト成リ時刻ヲ見合セ難ナク城ヲ攻取レヨトノ軍法ナリト知セケル相右衛門ハ吾カ察スル所ニ寸分違ハサレハ是偏ニ軍神氏神ノ教ナリト喜ヒ息ヲモツカス馳歸レハ丑下刻ヨリ掃部助ハ其マテ少モ眠ラス爐ニ當リテ待居タリシカ相右衛門カ歸ルト直ニ鐵漿衆ヲ召テ瓜生野新名爪兩方へ遠見ヲ差出ス兎角スル中ニ夜モ明テ十八日ノ辰刻味方ノ諸勢殘ラス差揃ヒ千百餘人ノ着到ナリ斯ル處ニ諸縣郡諸外城ノ敵勢凡ソ八九百千人ハカリ瓜生野口ニ押寄來ル由告來ルニソ兼テ手賦リアリシ七百六十餘人ヲ六手ニナシ

瓜生野口ニ忍ヒ行ヨキ詰リ六ヶ所ニ旗ヲモ堅ス伏シ居タリ敵ハ此事
夢ニモ知ラス宮崎城ヲ只一搦ニ攻落サント目ニカケテ足早ニ進ミ來
ルヲ向フサマヨリ一度ニ起テ突カ、ル敵ハアマリ仰天シテ弓鐵砲ヲ
投ステ蛛ノ子ヲ散スカ如ク諸縣サシテ逃歸ル其ヨリ味方ノ勢モ殘ラ
ス宮崎ニ引反ス佐土原勢ハ中途ニ控エ大手ノ合圖ヲ今ヤト待居
タレトモ何タル報モナケレハ左レハ時刻晚ハリヌトテ未下刻ニ及テ
千二百人ノ着到ニテ宮崎城下マテ押寄タリ尾達ノ大將ニハ島津藤四
郎溝口朝鑑齋等上下三百餘人ナリ新名爪搦手ノ大將ニハ外山次左衛門
米良久右衛門永野小兵衛以下上下五百餘人ナリ滿願寺口城乘ノ大將
ニハ伊集院熊太郎松木逸覺酒勾源次郎半成九郎次郎以下三百餘人ナ
リ斯ノ如ク三組ニ分レ三方ヨリ詰カケタリ此時城兵ハ七部通り瓜生
野口ニ出張シテ城中ハ掃部助手廻リノ八十人ト新名爪搦手ノ請手二
百五十餘人殘レリト雖モ寄手ノ勢ニ比フレハ九牛カー一毛ナレハ掃部

助一人モ出ヘカラスト制レテ只城中ヨリ五人七人ツ、出テ弓鐵砲ヲ
射サセ遠勝負ニテ時ヲ移ス處ニ瓜生野口ノ味方追々反リ來リ奈古山
ニ旗十五本サシタテ山蔭所々ヨリ人數五十七ツ、出ルヲ見テ島津
藤四郎松木逸覺ヲ始メ取モノモ取アエス新名爪ノ勢ニ逃加ハル味方
ノ勢之ヲ見テ後ヨリシクラミ追カクル爰ニ平野ノ地頭米良久右衛門
手ノ者六七十人眞丸ニ成テ楯ツキタテ蹈トメント下知ノタイ神妙ニ
ハ見エタレトモ靡キ立タル大勢足浮立ケルニ後ヨリ透間モナク追カ
クレハ反シ合スル者一人モナシ流石ノ久右衛門モ力及ハス貝吹テ逃
テ行ク之ヲ見テ新名爪搦手ノ味方二百五十餘人時分ハ好ッ打テ出ヨ
ト城戸推開キ度ニキツテ出テ後ヨリエイエイ聲ヲアゲ蓬心反セト罵
リケレハ敵ハ益々狼狽テ大敗軍トハ成ニケリ味方ハ機ニ乗ツテ佐土原
マテ二里餘ノ處ヲ追撃ニシテ敵ヲ打取ルコト雜兵共ニ百八十人ナリ
此勢ヲ拔サス佐土原城下十二坊マテ追ツメテ皆々分捕高名セリ

稻津重房武功
略記ヲ參取ス

稻津牛之助カ不覺ニテ味方敗北漫々橋六本槍ノ事

官崎勢ハ敵ヲ佐土原ノ十二坊マテ追ツメタルカ十八日ノ宵闇ナレハ
味方ノ軍勢途方ニクレ如何スヘキト云フ所ニ猪股又左衛門尉松葉又
左衛門尉荒武孫兵衛尉海老原助之丞安井相右衛門尉ナト申シ合セ頓
テ月出ナハ白晝ノ如クナラン其時城中ヨリ打テ出ルハ必定ナリ味方
ハ是マテ敵ヲ追來リ今朝兵糧シタルハカリニテ皆々痛ク疲レタリ其
上亂妨ニ心ヲヨセテナリ成ナハ敵ハ案内ノ地ト云ヒ殊ニ新手ノ
勢加ハリテ味方一人モ生テ歸ル者ハアルマシ今宵闇ノマキレテ幸ニ
早ク引取アルヘキ旨稻津牛之助ニ申シケレハ牛之助以テノ外ニ氣色
ヲ損シ只今攻落スヘキ城ヲ打ステ、逃支度ハ何事ソ各ハ敵ニ反リ忠
ト覺ヘタリトサモ暴氣ニ云ヒステ、進メ進メト下知シケル然トモ疲
レ果タル味方ノ勢闇サハ闇シ進ムヘキ氣色ナク只槍長刀ヲ杖ニツキ

立ヤスライテ居タリケル此體ヲ見テ阿萬五郎兵衛尉曾我主馬允兩人
安井相右衛門尉ヲ案内ニテ城ノ野頸光明寺口衛門ニ重忍ヒ入り黒田
番左衛門ト云フ者ノ家ニ火ヲカケテ燒立タリ城中暫ハ是ニ騒動シケ
ルカ兎角スル内ニ十八夜ノ月晝ノ如クニ輝キ出テタリ味方ノ軍勢町
家ニ蹈入り酒ヨ飯ヨト飲食ヒ思フマ、ニ亂妨ス成合丹後入道中村清
左衛門入道ハ老功ノ士ナレハ安井相右衛門尉等ト驅廻リ之ヲ制スレ
トモ牛之助カ下知ナルユエ耳ニモ聞入ス後ニハ歷々マテ打散テ中々
下知ニ從ハス城中ヨリ此有様ヲ見テ三方四方ヨリ押寄せ鬨ヲ突トア
ケタリ味方ノ勢鬨ノ聲ニ驚キ腰ヌケ足タユミ五人七人ツ、我先ニト
逃歸ル敵ハ後ヲ慕フテ透間モナク追ヒ來ル程ニ外山次右衛門尉澁谷
左馬允ヲ始メ十七人撃レケル崩レ立タル癖トシテ反シ合スル者一人
モナケレハ唯逃引ニ漫々橋今是ヲ浮橋ト云フマテ引ケレハ夜ハホノノト明タ
リ夜ノ内ニハ物ノ色分明ニ見エサルユエ後ヨリ逃來ル味方ヲ敵ソト

心得肝魂ヲ失ヒ精モ力モツキハテ兵具兵糧道服足半ノ類マテ皆路ニ
ヌキステ、這々逃ケルハ見苦シト云フモ愚カノ事トモナリ夜明ヌレ
ハ敵ハ益勝ニノリ驀地ニ成テ追カクル爰ニテ我々八人取テカヘシ打
死セヌハ殘ル味方ハ一人モアルマシトテ壹岐孫右衛門尉荒武彌兵衛
尉外山三郎左衛門尉松葉又左衛門尉猪股又左衛門尉小田原總右衛門
尉海老原助之丞安井相右衛門尉八人蹈止リ味方ノ遺置タル見苦キ物
共殘ラス溝壕ニ拾ヒステ彌兵衛尉相右衛門尉兩人ハ半弓ヲ以テ追來
ル敵二三人ヲ射タレトモ是ヲ事トモセス漫々橋ニ追ツメタリ八人共
已ニ打死ト見エタル處ニ橋ヨリ南ノ竹藪ヲカタトリ長倉織部正東次
郎兵衛尉伊集院源右衛門尉成合吉右衛門尉四人槍ツキタテ敵ヲ支へ
ケレハ此勢ニ馳セ加ハリ暫ク息ヲツキ逃ル味方ヲ助ケ居タルニ敵又
大勢競ヒ來リ此十二人モ已ニ打死トミエタル處ニ川崎大膳亮稻津九
郎衛尉堤五左衛門尉稻用孫兵衛尉成合丹後入道中村清左衛門入道六

騎ノ士附衆二十人程ニ旗三本モタセ山蔭ニサレタテ茂林ノ中ニ待受
テ大勢控エタル風情ヲナシ競ヒ來ル敵ノ足元ヨリ六人一度ニ突テ出
ツ是ヲ見テ長倉織部正ヲ始メ十二人ノ衆モ取テ反レエイノ聲ニテ
無二無三ニ斬タテケレハ敵シトロニ成テ漂フ處ニ山蔭ノ旗三本ユル
キ出ルヲ見テ大勢後詰スルソト心得タルニヤ敵ノ後陣ヨリ崩引ニ引
ケレハ大勢ノ味方虎口ノ難ヲ免レ不思議ノ命ヲ助カリケル是全ク六
騎ノ士比類ナキ手柄ニヨレリト敵モ味方モ褒ニケル今ニ至ルマテ漫
々橋ノ六本槍トテ世ニ芳ハシク云ヒ傳フルハ是軍ノコトナリ斯テ味
方ノ軍勢上下共ニ疲レハテ眼見アクル者モナク足履立ル人モナク此
ヤ彼ニ腰ヲナカケ暫ク息ヲツキ居タリ成合丹後中村清左衛門尉ヲ始
メ老功ノ人々ハ面々ニギリ飯ヲ持タレハ人々ニモ配分シ其ヨリ近所
ノ人家へ驅入り食物ヲトモラヒ熟柿蜜柑類拾ヒ取り是ニテ少シ氣力
ヲ得ヤウノ竹ノ杖ニスカリ宮崎ニ歸リケル稻津牛之助ヲ始メ臆病

ノ徒ハ過半夜ノ内ニ宮崎ニ逃歸レリ是ヨリシテ海老原助之丞安井相
右衛門尉ナト牛之助トハ云ハスシテ牝牛助トアタ名ヲツケ目ヒキ鼻
ヒキ私語キ笑ヒケリ宮崎軍記

稻津牛之助カ同類忠義ノ徒ヲ稻津掃部助ニ讒スル事

慶長五年十月十九日漫々橋ノ退口ニテ究竟ノ味方數十人死打セシ後
ハ暫ク諸方ノセリ合モナク剛臆ノ批判トリニテ様々ノ雜説多シ
就中稻津牛之助一味ノ徒ハ己等カ臆病ヲ隠サン爲ニ外山次右衛門尉
澁谷左馬允ヲ始メ佐土原ヨリ漫々橋ノ間ニテ度々蹈止リ敵ヲ追カヘ
シ味方ヲ助ケ手際好打死セシ手柄ヲハ稱セス却テ彼等腰脫ニテ早ク
引取サリシ故敵ヨリ生首ヲ拔レシナト打寄打寄沙汰シケリ之ヲ聞テ
海老原助之丞松田源兵衛尉川越左衛門尉槐島加兵衛尉崎田助左衛
門尉日野源左衛門尉成合吉右衛門尉小田原總右衛門尉外山三郎左衛
門尉伊集院源右衛門尉荒武彌兵衛尉安井相右衛門尉ナト大ニ憤リ惡

キ牝牛カ伴ノ口頭哉アハレ敵不慮ノ足元マテ寄來レカシ然ラハ彼牝
牛カ同類共ヲ虎口ニツキ出シテ腰脫ノサマヲ見ハヤト私語キケルチ
誰告ルトハナケレトモ壁ニ耳石ニ口アル世ノ習ヒ牛之助カ同類共傳
ヘ聞テ彼十二人ヲ始メ一味ノ者共カ掃部助ヲ腰脫ト沙汰スル由左モ
アリサウニ辨舌ヲ以テ掃部助ニ讒言ス掃部助之ヲ聞テ實ト心得以テ
ノ外ニ腹ヲ立テ是ヨリシテ彼者共ヲ一々打殺システントソ思ヒ入ケ
ル切通半右衛門黒木十兵衛兩人ハ掃部助カ手廻リノ士ナルカ竊ニ此
體ヲ十二人ノ士ニ告知セケレハ十二人ノ士深ク恐レ入り無失ノ罪ヲ
遁レン爲ニ稻津左右衛門尉吉田權内ヲ頼ミ掃部助ヲ惡口セシコト是
マテユメノコレ無キ旨サマサマ證據ヲ立テラビ言シタリケレハ一
旦ハ納得ノ由ナレトモ萬端以前ニ打變リ疎疎シキ挨拶ナルユエ軍ノ
評議ナト口ヲツクコトナク兎角手持惡クゾ見エニケル宮崎軍記
島津勢曾井城ニ攻來ル伊東勢千町越ニテ防戰ノ事

安井相右衛門尉ハ敵方ニ親キ縁類アリ能ク敵ノ様子ヲ聞出シ勝利ヲ得ルコト是マテ度々ナルカ慶長五年十月二十五日ノ晚原書ニハ十五トモ前篇ノ文ヲ按スルニ十月十五日ノ晚ハ相右衛門掃部助ノ前ニテ佐土原勢ヲ却ル軍略ヲト論セシ日ニテ掃部助カ手前未ク惡クナラサル時ナリ且下文ニ十月二十五日ノ夜三人打ツレ清武ニ差越ノ文モ見エタレハ原書定テ八二ノ字ヲ脱セシナルヘシ故ニ今姑ク二ノ字ヲ加ヘ斷シテ二十五日トス代ノ粗木藤七兵衛方ヨリ報知來リケルハ島津伊東ノ義ハ朝鮮陣以來誓書ヲ取カハシ兄弟ノ好ミヲ結ビ互ニ相援ハントコソ約シタルニ伊東方ヨリ其約ヲ變シ度々島津家ニ弓ヲ挽候フコト不屈是ニ過ス此上ハ有無ノ一戰ヲ遂ケ宮崎清武兩城共ニ攻潰シ頓テ飢肥ニ攻入り伊東カ本城ヲ乗取ヘキ旨覽島ヨリ申シ來リ候今月末來月初ヲハ過ルマシ用心大切ニセラルヘシトノ趣ナリ相右衛門尉ハ常ヨリモ懇ニモテナシテ使ノ者ヲカヘシ其ヨリ海老原助之丞成合吉右衛門尉へ此事如何スヘキヤト内談スルニ助之丞申シケルハ此趣掃部助ニ申シ入タリトモ聞入アルマシ左レハトテ捨置ンハ主君ヘノ不忠ナリ信友ノ事ナレ

ハ稻津左右衛門尉ヲ以テ掃部助ニ申シ入レ其様子次第ニ取計ラヒ申サハ如何ニトナリ吉右衛門尉相右衛門尉此議然ルヘシトテ左右門門尉ニ對面シ右ノ趣ヲ告ケレハ左右衛門尉悦ヒ入タルタイニテ早速掃部助ニ披露セリ案ニ違ハス掃部助大ニ氣色ヲ變シ彼徒黨ヲ組シ惡黨共何條事ヲ聞出スヘキ只今島津家ヨリ清武宮崎兩城ヲ攻落シ其後飢肥入ナドト云フコト蟻螂カ斧ヲ以テ牛車ニ向フニ同シ沙汰モナキ事ナシヨリ然ルニ彼惡黨共事ヲ左右ニ寓テ我ヲ脅サントノ事ナルヘシ惡キ奴原共ニ頓テ思ヒ知セントソ怒リケル左右衛門尉與醒已ニ座ヲ起ントセシカ此事今此ニテ申シカナヘスハ許多ノ勇士ヲ喪ヒ御爲ヨロシカルマシト思ヒ反シ膝立直シテ申シケルハ御疑ヒヲ以テ御立腹ハサルコトニテ候ヘトモ是マテ幾度トナク相右衛門カ申セシコト一度モ違ヒ申サヌ故戰フ毎ニ味方ノ勝利トナレリ是ヲ以テ考レハ今度ノ報知モ必定符節ヲ合セ申スヘシ然レハ一先彼等カ申ス處ヲ御承引ア

リテ其計略ヲナサレ萬一偽言ニテ候ハ、其期ニ臨ンテ何如様ニモ召
行ハレシヨソ大將ノ人ヲ棄サル本意ニテ候ハンカト恐ル所モナク申
シケル掃部助此一言ニナタメラレ尋常ナラス腹アシキ人ナレトモ片
頬ニテ打笑ヒ其儘奥へ入ラレケル左右衛門モヤウノ事ト思ヒナ
カラ退出シテ三人ニ面談シ爾々ノ由ヲ告ル其ヨリ相右衛門尉助之丞
兩人吉右衛門尉カ宅ニ參會シテ此度敵大勢ニテ攻來ンハ必定ナリ然
ハ掃部助カ手前ハ兎モ角モアレ主君ノ爲ナレハ我々一命ヲステ忠節
ヲ勵スヘシトテ三人膝ヲ組頭ヲ合セ評議ス相右衛門尉申シケルハ此
度敵大勢ニテ攻來ンナレハ懸合ノ軍ハ味方打負ンコト十二九ツナリ
敵モシ清武ニ寄來ラハ我カ一味ノ者共打死ト相定メ心ヲマツニシテ
横入スヘシ若又宮崎へ攻來ラハ清武ヨリスグリタル同心ノ者共横入
スヘシ萬一敵佐土原ト合體シテ三方ヨリ一度ニ寄來ラハ清武ノエリ
衆ト田野衆ト我等一味ノ者一ツニナリ敵ノ後ニ廻リ戰ノ最中ニ裏キ

リスヘシ其勢大抵百七十餘人アルコトナレハ敵勢殘ラス寄來リ五千
ヤ三千アリトモ百七十餘人ノ者共必死ニナリ敵ノ思ヒ寄サル後ヨリ
一度ニ斬入ナハ十ニ十斬崩スヘシ此議何如ナランヤト申シケレハ吉
右衛門尉助之丞聲ヲソロヘ天晴ヨキ軍法此上アルヘカラス片時モ早
ク矢野侃世平部長右衛門平川分右衛門へ密談セントテ二十五日ノ夜
三人打ツレ清武へ差越三人へ内談ス三將大ニ喜ヒ田野紫波洲崎曾井
諸方ノ合圖ヲ定メ横入裏キリ二ツニ一ツノ計略ニ相定メ猶又敵方ニ嗅
物聞ヲ出シ今ヤ今ヤト相待ケル處ニ同月晦日島津勢都合三千二百餘
人ニ手ニ分レ移佐倉岡兩所ヨリ千町表ニ寄來リ先ツ曾井城ヲ乘落シ
其勢ヒニ清武城ヲ攻取ント大軍ノ勢ヲミセ野山溝川嫌ヒナク亂入ス
味方ノ勢ハ飢肥宮崎ニ分散シテ僅ニ一千餘人ナリ其内細江浮田兩所
ニ番勢アリ殘テ八百ハカリヲ三手ニ作り三方ヨリ押出シ千町越ヲ切
所トシテ防戦ス清武ヨリ一番槍梁瀬源兵衛尉二番橋口彈左衛門尉阪

ヨリ彼方ニ進ンテ登リ來ル敵ヲ突伏セカ、レヤ老共トイラテケレハ
心得タリトテ松浦七左衛門尉池田彌八黒木彌六ナト彼レ此レ二十人
ハカリ藪地ニ成テ敵ヲ阪口マテマクリ卸スト雖モ續ク味方ナク敵ハ
大勢ニテ後ヨリセリ立セリ立モリカヘスニソ味方モ味方兼又元ノ峠ニ
引退ク敵猶競登ル處ニ宮崎ヨリ一番槍日野源左衛門尉二番谷口仲左
衛門尉彼此十六七人眞丸ニ成テ敵ヲ横筋違ニ突崩ス其外川越宅左衛
門尉井上助八井八重久助槐島加兵衛尉崎田助左衛門尉落合五郎兵衛
尉山本源之丞岩切源之丞小玉助之丞小野平馬丞黒木猪右衛門尉宮田
四兵衛尉日高勘解由日高久七永田久内稻津吉右衛門尉ナト追々驅來
リ面モフラス斬テ廻ル敵ノ二ノ手倉岡勢此横入ニマクリ立ラレ四途
路ニ成タレトモ先手穆佐勢ハ猶モ進ミカ、リ軍ヲ持テ見エタリ之ヲ
見テ倉岡勢ノ大將ト見エタル者大音アケ蓬心者共ノ舉動哉敵ハ小勢
ナルソ味方ノ先手ヲハ恥サルカ取テ反セト下知スルヲ聞ト齊ク先手ニ

繼ヒテモリカヘス味方己ニ總敗軍ト見エタル處ニ宮崎ヨリ二番ノ横
槍安井相右衛門尉川越左右衛門尉海老原助之丞杉原大藏落合市兵衛
尉鹿野屋助左衛門尉松葉理兵衛尉木宮内藏右衛門尉木宮喜右衛門尉
其外兼テ一味同心ノ者七十餘人敵ノ先手穆佐勢ノ真中ニ斬テ入り獅
子奮迅ノ怒ヲナシ一マクリニマクリ立ル此時小山田清右衛門尉千町
越ノ供養塚ニ上リ旗三本ツキ立テ狼煙ヲ舉タリ敵之ヲ見ルト齊ク色
メキ立テ見エタル處ヲ相右衛門尉助之丞ナト一手ノ七十餘人敵ノ中
ヲ縦横ニ驅廻リ敵勢ニ紛レテ清武紫波洲崎ヨリ後詰ノ來ルヲハ知サ
ルカ引ヨ逃ヨト喚キケレハ敵ハ總崩ニ成ツテ有田郷マテ退散ス味方
ノ勢勝ニ乗テ有田ノ渡リ納島マテ押ツメ雜兵共ニ六十四人打取リ其
日ノ軍配宮崎ニテハ宮田次郎兵衛尉清武ニテハ日高出雲勝鬨ヲ執行フ
味方ニハ成合吉右衛門尉左ノ腕ニ薄手ヲ負ヒ雜兵六人打レタルハカリ
ナリ此合戦ハ成合吉右衛門尉海老原助之丞安井相右衛門尉三人ノ軍

法能圖ニ中リ其上三段横入手柄ニ因テ味方不慮ノ勝利ヲ得タリ左ナクハ
十二八ツ九ツハ曾井城敵ノ有トナルヘシ左候フテ敵ノ大勢曾井城ヲ
手固ク守ラハ清武ト宮崎トノ間隔リテ互ニ援ケ救フコトナルマレ此
慮ヲ見テ佐土原ヨリ宮崎ヲ攻穆佐倉田ヨリ清武ヲ攻ルナラハ最危カ
ルヘキニ三人カ計畧ニ因テ此戰ヨリ後ハ敵頭ヲ出スコト能ハス然ト
モ掃部助猶モ心中解スシテ三人ニハ何ノ褒美モナク却テ彼等掃部助
カ下知ヲ承ラス七十餘人ヲ引率シ宮崎ヲ驅出テタルハ一城ノ大將ヲ
蔑如スル不忠不禮ノ者ナリ罪科ヲ加ヘラレサルハ掃部助慈悲深キ大
將故ナリト例ノ牝牛助カ同類共口ニ任セテ讒言セリ同上
安井相右衛門敵ノ内應ヲ得川越猪股兩士稻津掃部助ニ直諫ノ事
慶長五年十一月二日ノ晚佐土原ノ岩切道秀ヨリ安井相右衛門尉ニ申
シ來リケルハ去月晦日穆佐倉岡ヨリ清武へ出張シテ大後レヲ取リシ
ユエ佐土原ヨリ此旨巨細覺島ニ申シ遣シケルヲ諸縣所々ノ地頭地頭

ナト承リ散々ニ立腹シ昨今ハ佐土原ト中惡クナリ互ニ讐敵ノヤウニ
相成リ候ヘハ佐土原ヨリ宮崎ニ相働キ申スヘキハ思ヒモヨラス候ヘ
トモ諸縣所々ノ義ハ諸大將諸士晝夜打寄評議シテ一命ニカエ是非清
武城ヲ攻取リ鷹島ヘノ面目ヲ雪ントテ町人百姓マテ作業ヲ休メ牙ヲ
嚙申ス由ニ候フ間御用心アルヘントノ趣キナリ相右衛門尉具サニ聞
届ケ毎モヨリ懇ニ饗シテ使ノ者ナカヘシ其ヨリ成合吉右衛門海老原
助之尉ニ對談シケレハ助之丞申シケルハ是マテ相右衛門物聞シテ味
方不思議ニ勝利ヲ得タルコト度々ナレトモ近頃掃部助カ手前無興ニ
成ヌル上ハ今更申シ入タリトモ却テ惡事ノ端タルヘシ然レトモ今度
ノ報知ハ軍神ノ告ト云フヘキ程ノ吉瑞ナレハ如何トモシテ掃部助承
引アルヤウニ計ヒ候フコト專一ナリ然レハ先猪股又左衛門尉川越左
左衛門尉ヲ招寄内談スヘシトテ兩人ヲ招キ爾々ノ由ヲ語ル左衛門
尉申シケルハ斯様ナル御爲ヨロシキ義ヲ聞ナカラ掃部助手前ヲ憚リ

泥ミ居候フハ沙汰ノ限リニ候吾等ヨリモ又左衛門ハ當時掃部助ニ後
暗キコトモナケレハ又左衛門ニ申サセ某モ小脇ヲツメ自然承引ナク
ハ某存分有之候何事モ又左衛門ト某ニ任セラレヨト又左衛門尉打點
頭ソレト云フマ、ニ兩人打ツレ掃部助ノ陣屋ニ參リ案内ヲ乞ハ
スシテ直ト其前ニ出テ右ノ荒増クスミ切テ申シ述レハ掃部助何如思
ヒケン顔色潤ヒ詞ヲ和ラゲ申シケルハ相右衛門事敵方ニ好縁リアル
ユエ前々ヨリ度々ヨロシキ事ノミ告知セ勝利ヲ得タルコト多シ其上
朝鮮陣以來手柄計畧モ諸人ニ勝レ忠節ノ者ナレハ飢肥表ニ申シ上大
身ニ取立ント思フ處ニ案ノ外徒黨ヲ企テ我等ヲ腰脫ノ臆病者ト沙汰
スル由許多ノ口ヨリ慥ニ聞届候フ間屹度吟味ヲ遂ケ一々打果スヘシ
ト存スル處ニ彼黨類共近頃ハ色々トワビ言スル上ハ殿ノ御爲ヲ存シ
一先命ハカリヲ助ケ置タルナリ然ルニ又々敵方ノ様子ヲ其方達ニテ
申シ聞セ候フ段神妙ノ事ニ候其義ニ於テハ只今佐土原表油斷タルヘ

ケレハ相右衛門肝煎ヲ以テ佐土原ヘ相働キ家焼ナト仕リ一手柄顯シ候
ハ、是マテノ不祥ヲ解ヘシトナリ兩人ハ其座ヲ退出シテ右ノ趣委細ニ
申シ達シケル上

安井相右衛門等佐土原ニ燒働キノ事

安井相右衛門尉等ハ掃部助口上ノ趣ヲ聞テアラハトテ成合吉右衛門尉
海老原助之丞川越左衛門尉川越宅左衛門尉松田源兵衛尉高橋六左
衛門尉井野喜右衛門尉猪股又左衛門尉會合シテ佐土原表放火ノ計畧
ヲ内談ス折節一味ノ勇者槐島加兵衛尉崎田助左衛門尉日野源左衛門
尉小田原總右衛門尉外山三郎左衛門尉荒武彌兵衛尉伊集院源右衛門
尉ナト究竟ノ面々ハ飢肥清武ニ行違ユナリ吉右衛門尉ハ千町越ニテ
ノ手創未タ平癒セス助之丞ハ瘡病ニテ出陣出來カタシ如何セシヤト
泥ミ居タルニ川越左衛門尉顔色變シ眼角ヲ申シケルハ小勢ヲ以
テ敵ノ中ニ打入リ勝負ヲ決スルコソ武士ノ本意ヲヲメ且古ヨリ大勇

ハ傷クコトナシト云ヘリ斯様ナル忍上働キノ時大勢ハ却テ足纏ヒナ
リ各五六人ニテ敵油斷ノ處へ忍上行家焼ナト仕ラシコト最易キナ
リ殊ニ無類ノ案内安井相右衛門ヲ先ニ立テ相働シニ何ノ恐レカ有ヘキ
去來打立シトテ十一月三日西風木ヲ折テ吹シキリ折々時雨少シ小天
滿天神モ我々カ讒言ノ罪ニ沈ムヲ哀レトヤ思食ヲン早々打立且トテ
一味同心ノ面々都合八十四人ヲ六手ニ分ク一手十四人組ニシテ左
衛門尉宅左衛門尉喜右衛門尉源兵衛尉六左衛門尉相右衛門尉六人ヲ
一組ノ頭トシテ佐土原天神町ニ忍上行家放火シケルハ敵ハ自火ト心得
諸方ヨリ驅付火ヲ鎮シト相集ル處ニ井止助八井八重休助日高次右衛
門尉長田伊賀介長田彦十郎清作内大岩根源右衛門尉杉田又左衛門尉
ナト一命ヲ捨テ、相働キ敵四人打殺シケルハ敵初テ之ヲ悟リ口々ニ自
火ニテハナシ敵押寄テ家焼スルツ此大風ニ城ヲ燒レテハ大事ナリト
聲々ニ呼ハリケル程ニ敵一人モ見エス城中サレテ引ヌルユエ足元マハ

ラニ成ニケルニソ八十四人ノ味方一所ニ集リ已ニ引退ントスル處ニ
城中ヨリ敵ハ少勢ナルソ取包ンテ一人モ洩サス打取レト下知ナシ
諸方ノ口々ニ人數ヲ賦リテ味方ノ歸ル路ヲ取截ントヒシメキケル味
方ノ諸卒相右衛門ニ向ヒ難ナク退クヘキ道ヤアル如何セント云フ相
右衛門ハ竊ニ親キ者ノアリケルニ立寄テ承ルニ幸平松筋バカリ人數
未タ立廻ラサル由ナレハ一足モ早ク引ントテ味方ヲ纏ヒ六手ニ分ケ
二松筋此ニ彼コ火ヲツケ煙ノ下ニ紛レ平松郷ヲ目當テ引退キ廣瀬ヲ
渡リ潮路ヲ指テ歸リケル此趣掃部助聞届ケ少ハ機嫌ヨケニ見エケレ
トモ猶心底ハ解サリケリ上

日向纂記卷十三終

日向纂記卷十四

稻津掃部助宮崎城ヨリ清武城ニ移ル事

諸縣勢千町越ニテ後レテ取リシ後ハ此無念是非清武城ヲ乘取ヘシ然
 ラハ宮崎ハ攻スシテ自ラ落城ニ及フヘシ覽島ヘノ申立是ニ過ヘカラ
 スト評議一決シ明暮此沙汰ノミニテ百姓マテ麥作モセス兵糧足半腰
 ニツケ齒ヲ切リテ合圖ノ一ツ貝ヲ待ケル由聞エケレハ掃部助ハ密ニ
 清武城ニ移リ堅固ニ守ルヘシ弟牛之助ハ矢野侃世介副ニテ人數三百
 五十人ヲ從ヘ宮崎城ヲ相守リ然ルヘシトノ評議相定リ慶長五年十一
 月十一日兄弟入換リ兩城共稱ク用心アリ同上

稻津牛之助カ同類忠義ノ徒ヲ陷ント謀ル事

安井相右衛門尉成合吉右衛門尉海老原助之丞外山三郎左衛門尉荒武
 彌兵衛尉伊集院源左衛門尉ナト武勇スクレタル二十四人ノ面々モ稻
 津掃部助カ手前少シ窺キタルテイニ見エケル處ニ十一月十一日掃部

助清武ニ引移リシ後ハ牛之助宮崎城代ナレハ之ニ與スル腰脫ノ倭人共彌勢ヲ得テ折々打集リ已等カ口ノ利タルニ任セ彼武勇スクレシニ十四人カ事ヲサマノ牛之助ニ讒言シテ已ニ追放ニ定リヌ矢野侃世此事骨髓ニ徹テ御家ノ一大事ト思ヒケレハ様々思案ヲ運ラシ稻津左右衛門尉廣瀬與三切通半右衛門等ニ密談シテ掃部助ヲ申シ宿メ牛之助ニハ侃世直ニ教諭アル故ニ追放ニハ及ハスシテ濟ヌ又一日牛之助下知ニテ安井相右衛門尉ヲハ小田原總右衛門尉ニ殺サセ總右衛門尉ヲハ松田源兵衛尉ニ殺サセ源兵衛尉ヲハ成合吉右衛門尉ニ殺サセ吉右衛門尉ヲハ海老原助之丞ニ殺サセ助之丞ヲハ川越左衛門尉ニ殺サセ左衛門尉ヲハ猪股又左衛門尉ニ殺サシメントノ計畧ナル由風聞ス後ニ是ハ虛説ナリ牛之助カ小智ヲ以テ彼一味ノ衆ニ疑ヒテ起サセ中ヲ絶セントノ巧ミナリトソ聞エケリ上同

矢野侃世稻津掃部助ヲ諫ル事

慶長五年十一月十八日ノ曉八代ノ榎木藤七兵衛方ヨリ安井相右衛門尉ニ申シ來リケルハ近頃覺島ヨリ喜入又八郎出張アリテ申渡セル趣ハ向後伊東家ト弓箭取合ノ義ハ無用タルヘク候島津家モ關東一味ノ企テアリ伊東家ハ近國ニテ類ヲ離レ只一人無二ノ關東方ナレハ彼地ト勝負ヲ角ヒ候フテハ家康様ニ對シ申シワケ成リ難ケレハ近日伊東家ト和談アルヘシトノ事ニテ今ヨリ後清武宮崎兩所ニ人數差出スマシトノ下知ナレハ諸外城皆々帶テ解申シ候頓テ其許ヘハ深歲善哉坊參ラル。答ノ由沙汰ニテ候心得ノタメニ知セ候ナリト相右衛門尉早速矢野侃世ニ内談シケルニ侃世乃チ右松市左衛門尉川崎七右衛門尉合ノ上掃部助ヘ申シ入ルト雖モ掃部助承引ナク疑シキ挨拶ナリ然ル處ニ掃部助カ物聞津川茂右衛門須田五郎助諸縣ヨリ罷歸リ相右衛門カ承リシニ毛頭違ハサル口達ナリ掃部助乃チ稻津九郎兵衛尉川崎七右衛門尉右松市左衛門尉平部長右衛門尉平川分右衛門尉甲斐玄蕃田

中四郎左衛門尉田野ノ組頭楠原彦左衛門尉海老原越中ナトヲ招キ寄
近日穆佐表へ相働キ然ルヘシトノ内存ナリ侃世暫ク思案シテ申シケ
ルハ島津家ヨリ和談ノ義是アルニ於テハ一入幸タルヘシ仔細ハ譬島
津領ノ内五个所七个所伐取候フトモ以後我カ有ニハナルマシ只今ノ
宮崎トテモ高橋家關東降參ノ上ハ終ニ我カ有ニ成カタカルヘシ我カ
有ニナラサルヲ知ナカラ多クモナキ味方ノ諸卒ヲ喪ハシコト大將ノ
本意ニ非ス然トモ縣ヲモ打亡シ大隅薩摩ニモ攻入り島津高橋兩家ノ
根ヲ絶候フ計略アラハ其ハ關東へノ忠功比類ナカルヘシ其上本主滅
亡ノ後ハ懸命伐取ノ國ナレハ十二七ツ八ツ當家へ拜領ナサレ御大身
ニナシ申スヘキ儀モ是アルヘク候ヘトモ此計略ハ雲ニ梯ナリ關東へ
御味方ノ一筋ハ小勢ヲ以テ宮崎四萬石ノ地ヲ伐取諸縣佐土原所々ノ
セリ合ニテ先一通リ相届キ申シ候今幸ニ島津家ヨリ手ヲ下ラレ和談ア
ル上ハ其意ニ任セラレ合戰ヲヤメ當時ノ飢肥南郷清武宮崎ヲ丈夫ニ固

メ玉ハン計畧コソ公私ノ御爲ナルヘシ彼方和談アルヘシトテ油斷ア
ルヲ幸ニ穆佐へノ働キハ愨ノ熊鷹ニテ候ハンカト憚ル所モナク辭ヲ
盡シテ申シケレハ列坐ノ衆モ皆笑ツボニ入テ見エケル掃部助何如思
ヒケルニヤ常ニハ剛愎ナル生質ニテ已カ云ヒ出セルコトハ主君ノ意
ニテモ少モ折レサル男ナルカ侃世ノ諫言ヲ聞ト齊ク機嫌ヨゲニ打笑
ヒ何如何如ニト打點頭様々饗應アリケレハ侃世モ大悅是ニ過ストテ
宮崎ニ歸リケル同上

稻津掃部助穆佐ヲ攻ル事

矢野侃世宮崎ニ歸リシ後掃部助ハ終夜燈ニ對シテ眠モセサリシカ翌
十九日未明伯父ノ稻津因幡守稻津重房武功畧記ニハ因幡守ハ掃部助ノ養父ナリトス舍弟牛之助川
崎七右衛門尉右松市左衛門尉楠原彦左衛門尉以下ノ諸士ヲ招キ下知
シケルハ細江浮田ノ番勢ト田野衆ニ中野衆少々相加ヘ明二十日早天
ニ細江ヲ打立穆佐城へ押寄攻取申サルヘシ敵油斷ノ砌ナレハ必ス大

勝スヘシトテ三方ノ勢都合二百餘人俄ニ驅リ催シ穆佐城ニ押寄鬪テ
突ト作り揉ニモンテ攻入り一ノ城戸打破リ既ニ本丸ニ附ントスル時
城中ヨリ究竟ノ射手二十餘人鏃リテソロヘ指ツメ挽ツメ射ケル程ニ
手負數人ニ及ヘリ我慢ニ攻入ンモ城險阻ナレハ協ハス味方ノ勢小楯
ヲ取テ引退ントスル處ニ城中ヨリ四五十人打テ出テ後ヲ慕ヒ喰ヒ止
ントヒシメク引立タル味方ノ勢我先ニト足ヲ亂ス之ヲ見テ田野衆楠
原彦左衛門尉ヲ始メ谷口十助川添軍助楠原喜右衛門尉小鹿倉兵部丞
ナト取テカヘシ敵ヲ城中ニマクリユミ徐々ト引ケルカ象越ニテ小高
キ屋敷ノ有ケル岸ノ上ヨリ婦人二三人ハカリ顔サレ出レケルヲ見テ
小鹿倉兵部丞不圖思ヒケルハ二百人味方穆佐ヘ相働キ敵ヲハ一人モ
打ス却テ味方數人手創ヲ負ヒ一ノ城戸押破リタル證據モナク面目ヲ
失フタリ左ヲハ此婦人ナリトモ伴テ歸ントテ突ト走り入り主人ト見
エタルヲ會釋モナク勇力ニ任セテ昇抱キ飛カ如ク味方ノ勢ニ追付ケ

ル之ヲ見テ城中ヨリ五六十人真丸ニ成テ追カクル退口ノ癡足並ソロ
ハス敗軍ト見エタル處ニ川崎源右衛門宮崎攻ノ時川添源右衛門アリ蓋
川崎疑クハ川添ノ訛歟然トモ本番及ヒ日
向記皆川崎ニ作ル故ニ今敢テ妄ニ改メス川崎彌六川越源八堀口喜右衛
門尉松山治部右衛門尉松山六藏川越彌二郎海老原清作落合島之助川
越兵衛左衛門尉川越藤左衛門尉船山治部左衛門尉川越與左衛門尉片
井野藤七兵衛尉石那田勘八以下カケツケ横槍ニ突カ、ル小鹿倉兵部
丞ハ奪取タル婦人ヲハ他ニワタシ大音揚テ田野衆大勢後詰ニ來ルヲ
ハ知サルカ一度ニ突ト取テカヘシ穆佐城ヲ乗取ナリト呼ハリ槍打振
テ突カ、ル敵モ協ハスト思ヒケルニヤ貝吹テ引入ケル此度田野衆働
キナクハ敵追々大勢ト成テ活テ歸ル味方ハ一人モ有マシトノ評判ナリ
又小鹿倉兵部丞カ奪ヒ取シ婦人ハ穆佐ノ組頭山本越後守カ女房ナリ
トソ聞エケル此戰ヒ掃部助モ侃世ニ對シ面目ナクヤ思ヒケン暫時ノ
程ハ病氣ト稱シテ引籠リ諸士ヘモ對面ナカリケル同上

飛松雅樂助田野衆ヲ頼テ篠原ニ寇スル事

島津家ノ切寄篠原ハ飛松ノ組頭飛松雅樂助カ累年ノ讐ナルカ内々田野衆ヲ頼ミ密々ニ打取ントソ巧ミケル此趣田野ヨリ掃部助ニ申シ出ケレトモ掃部助モ過ル頃穆佐ノ後レニ後悔シテ承引ナク兎角延引シケルカ雅樂助ヨリ又々是非ニト頼ミ來ル由田野ヨリ再應申シ出ケルニソ掃部助モ已コトヲ得ス自分ハ少モ存ゼサル體ニテ田野衆計ヒ次第ト申シケル是ニ因テ慶長五年十二月三日巳ニ打立ントス川越兵衛左衛門小鹿倉兵部丞兩人申シ合セ云ヤウ去月二十日庚申ノ日ニ西方ニ向テ戰フ故ニサセル事ナク危キ命助リタルマテナリ明三日モ癸酉ノ日ニテ殊ニ十二月ノ節ナリ西方ノ敵ヲ撃シハ何如トテ日高出雲守ニ問ヒケレハ出雲云明三日東ヨリ西ニ向テ戰ヘハ戰敗ル、日ナリ況ヤ歳ノ終リ陰中陽ノ節日ニテ專ラ慈悲善根ヲ行ヒ慎ノ日ナルニ却テ凶器ヲ動シ多クノ人ヲ殺サンコト天神地祇軍神等モ見放シ玉フヘシ

明後四日モ土曜星壁宿ニテ戰滅日ナリ五日ハ乙亥ノ日木曜星木性ノ日奎宿西ニ當リ東方ヨリ西ニ向テ勝ヘキ天ノ賦命ナリ故ニ軍神擁護アリ必ス晝ノ中ニ戰ヘト教ヘケルニソ五日ノ曉寅刻田野勢出陣シテ篠原ニ押寄飛松雅樂助案内ニテ鬨ノ聲ヲモ立ス小鹿倉兵部丞勇力ニ任セ太刀打振一番ニ斬テ入ケル程ニ敵ハ思モ寄サルコトニテ驚キ騷キ目ヲスルル、弓ヨ刀ヨト呼ハリ女童ハ偃レ伏シ山麓サシテ啼匿ル川越藤右衛門尉本野清右衛門尉坂元茂助川越兵衛左衛門尉川越長助阪元太郎左衛門尉中村與助小山田三郎右衛門尉其外田野衆五十餘人コミ入コミ入斬テ廻リ川越兵衛左衛門尉ハ永田三右衛門ヲ打取リ本野清右衛門尉ハ山下治部左衛門ヲ打取リ小鹿倉兵部丞ハ篠原式部左衛門ニ渡リ合ヒ戰ヒケルカ共ニ劣ラヌ大力ニテ組伏ント志シケルニ式部左衛門深手ヲ負フテ逐電セリ其外手負打死七八人ニ及ヒケレハ敵協ハス逃匿ル其ヨリ田野衆一同ニ頭谷ノ尾ニ登リ午下刻勝鬨ヲ

揚テサ、メキ渡テ歸陣セリ去月二十日穆佐ノ退口並今度篠原ノ戦ヒ
何レモ小鹿倉兵部丞カ勇力ノ程拔群ナリトノ取沙汰ナリ上

矢野侃世屢稻津掃部助ヲ諫ル事

嶋津家モ關東へ降參ノ企テアリテ當家ニモ和談ノ取結ヒアルヘキニ
定リシカトモ穆佐篠原兩度ノ戦ヨリ佐土原衆諸縣衆大ニ潰リ此上ハ
伊東家ト和談ノ義手切ニ相定メ此趣覺島ニ言上シ明年正月三日過ナ
ハ佐土原諸縣兩旗ニテ宮崎清武共ニ攻潰スヘシトノ評議ニ一決シ節
季ニナリヌレハ喜入又八郎ハ覺島ニ歸リケル由風聞ナリ侃世ハ此由
傳へ聞テ是ハ當家ノ一大事ナリト只一人歎キ思ヒケレハ折々掃部助
ニ向ヒ是非ニ島津家ト和談然ルヘキ旨諫メケレトモ掃部助睨ト納得
コレナキ體ナリ上

莊内櫛間合體シテ鯛取嶺ヨリ襲ヒ來ル事

慶長五年十二月二十四日島津領莊内勢ト秋月領櫛間勢ト八郎野ニ會

合シテ兩所ノ勢ヲ結ヒ大勢ニテ南郷ノ内鯛取嶺ニ攻上リ南郷ヲ攻取
ント勇ミ來ル南郷村々ヨリ早速出張シテ防戦スト雖モ不意ノ迫合ニ
テ備へ整ハス殊ニ小勢ヲ以テ險阻ヲ押上ントス敵ハ頂上ヨリ鐵砲ヲ
打カケ一時ニマクリ卸サントス味方手負多クシテ阪口マテ引退キ既
ニ敗軍ニ及ントスル處ニ大場十右衛門尉日高勘左衛門尉温水助之丞
弓削次郎左衛門尉ヲ始メ追々驅付通山ヨリ敵ヲ目下ニ見テ横合ニ突
崩ス敵仰天シテ四途路ニナリケル時又中村彌七中村藤七兵衛尉ヲ始
メ究竟ノ手ダレ共側ノ尾ニ立並テ横合ヨリ鐵砲ヲ打懸ルニソ敵モ手
負死人若干出來亂レ立テ見エケル阪口マテ退キケル味方ノ勢一度ニ
突ト取テ反シケル處ニ味方ハ追々馳續キ終ニ敵ヲ追崩シ不思議ノ勝
利ヲ得タリ其後櫛間ノ内田某南平ノ川越某ニ語テ云島津高橋秋月何
レモ石田治部少輔殿一味ナリ然ルニ稻津掃部助ト云人勇モ謀モ人勝
レタル故ニ高橋領宮崎四萬石ヲ打取リ只今ハ薩摩殿ノ領分諸縣郡ノ

内ニ手ヲ入レ又ハ中務殿領佐土原へモ度々打入頓テ山ヨリ東ヲハ攻
取ヘシ左アレハ飢肥ヨリ大勢合力アリテ先移佐高岡ヲ打取ルヘシト
企テラレ候由風聞アリ是ニ由テ島津殿ヨリ櫛間ニ加勢ヲ出シ飢肥ヲ
搦ン方便ニテ大勢鯛取嶺ニ詰上リ南郷ヲ家焼シ飢肥ヲ脅サントセシ
處ニ案ニ相違シテ飢肥衆早速驅付勝利ヲ得ラレシ故其後ハ戦ノ沙汰
モ無リシト申ケル由ナリ同上

矢野侃世國事ニ心ヲ盡セシ事

明レハ慶長六年正月二日矢野侃世ハ年禮トシテ宮崎ヨリ飢肥表ニ參
上シテ主君東禪公へ出仕アリ左右ノ人ヲ退ケ宮崎ノ儀巨細言上アリ
君前退出ノ後川崎大膳亮肥田木圖書助長倉織部正落合平左衛門尉其
外老功ノ衆數寄屋へ會合アリテ島津家ト和談ノ儀一ツ又稻津掃部助
我儘ノ舉動多ク人ヲ人トモセス成合吉衛門尉海老原助之丞川越奎右
衛門尉安井相右衛門尉等二十四人ノ忠功アル勇義ノ士ヲモ或ハ成敗

シ或ハ追放スヘキナト相企ルユエ究竟ノ士ナト皆後足ヲ履候是ニツ此
二个條ハ當家ノ一大事ト存シ拙キ我等ナカラ様々口能ヲ盡シ候ヘト
モ同意ナキ體ニ相見エ候此上ハ君意ヲ以テ屹度御裁斷ナサル、ヨリ
外ハユレ有間敷候只今其儀ナク掃部助カ威勢日ニ添テ相加ハリ候フ
テハ末末六カシク成立申ヘク候二葉ヲ割サレハ斧柯ヲ尋ルトヤラ申
ス言ノ候御家ノ爲能々御吟味肝要ニ候フト申シケレハ列坐ノ物頭衆頭
ヲ傾ケ目ト目ヲ見合セ皆一同ニ感涙ヲ浮へ侃世ノ直言恥入タリ然シ
此事沙汰ナシ沙汰ナシトテ面々宿所ニ歸リケル侃世ハ其晚終夜海邊
通リシテ伊比井ノ本源寺矢野仁兵衛儀朝ノ撰セシ妙本寺香格記ヲ案スル
州ニ下リ七浦ヲ領シ瀨平ニ城居セシ時房州ノ妙本ニテ辨當ナト使ヒ翌三
寺ヲ撰シテ建ル所ニテ矢野氏代々墳墓ノ地ナリ
日午刻宮崎へ歸着セリ四日ニハ早朝ヨリ清武ニ差越掃部助へ一禮畢
テ打炮ヲ手ニ持ナカラ申シケルハサテ近キ内ニ佐土原諸縣ヨリ當方
へ寄來ルヘキハ必定タルヘク候へハ御用心專一ニ候其ニ付テハ成合吉

右衛門尉安井相右衛門尉海老原助之丞川越左衛門尉等二十四人ノ
手前疑ヒナク以前通り精ヲ出シ奉公致シ候フ様ニ御才覺專一ニ存シ
候忠功勇義ノ武士ハ面々ノ手柄ヲ鼻ニアテ人並ナラヌ臆病ノ徒ヲハ
鳥獸ノ様ニ嘲ル者ニ候左云ハレタル者又類ヲ求テ勇義ノ士ヲサマ
ト讒言シ終ニハ無質ノ罪ニ落スコト古今世ノ習ヒ淵底御存知ノ事ナ
レハ委細申スニ及ス能々御心ヲ宥メラレ向後彼衆ヲ懇切ニ仰セラレ
候フコト主君ノ御爲次ニ貴殿第一ノ御爲カト存シ候サテ又鳥津家へ
合戦御仕懸候フコト先日モ諫メ申セシ通り以來御見合セ然ルヘク存
シ候フト詞ヲ盡シ理ヲ明メテ申シケレハ掃部助道理ニ服シテ申シケ
ルハ二十四人ノ衆身上ノ事御心安カルヘシ又鳥津領へ働キノ儀今日
ヨリ必シト思ヒ止リ申スヘシトテ敵來ン時ノ防キ様ナト侃世ニ相談
セラレケレハ侃世モ軍法手賦リノ事トモ底意ナク物語リアリテ宮崎
ニ歸リケル其ヨリ安井相右衛門尉ヲ招キ相構ヘテ掃部助並牛之助カ

不祥露程モ心ニ懸ラレナヨ我等愚案ヲ運ラシ殿ノ御前宜ク申シナシ
且掃部助ノ手前モ埒ヲ開申シ候ヘハ是ヨリハ以前ノ通り疑ヒテ晴レ
忠誠ヲ勵シ一味ノ面々彌同心シテ過急ノ時ノ御爲ヲ忘レズ相働キ第
一ハ佐土原諸縣兩所ノ嗅物聞テ大切ニ心懸ラレヨトテ銀錢ナド相渡
シ且酒飯ノ饗レ懇ニシテ歸シケル其ヨリ吉右衛門尉助之丞左衛門尉
ナモ一人一人招ヒテ右ノ趣懇ニアリントナリ同上

矢野侃世安井相右衛門ニ託シテ敵情ヲ探ル事

慶長六年丑正月七日矢野侃世ヨリ一筆ヲ以テ安井相右衛門尉ニ大切
ノ内談アリ只今入來玉ハレカシト申シ遣シケルニ相右衛門尉ハ折惡
ク腹痛泄瀉ニテ一兩日以前ヨリ大ニ草臥伺候仕リカタキ旨答ヘケレ
ハ侃世直ニ相右衛門尉カ陣小屋ニ來リ申シケルハ近頃ノ風説ニ諸縣
ヨリ清武ヲ攻佐土原ヨリ宮崎ヲ攻取ヘキ由申スナリ虚實ノ程睨ナラ
サレハ辛勞ナカラ敵地ニ忍ヒ行テ敵ノ様子ヲ聞定メ忠節ニメサレヨ

ト申サントテ參シ候ヘトモ此容體ニテハ中々力及サル儀ナリ如何相
 計ヒ然ルヘキヤトナリ相右衛門尉聞モ敢ス起直リテ人多キ中ニ某一
 人ヲ御用ニモ立ヘキ者ト思食是マテ御出候フテ忠節ニセヨト御坐候
 上ハ縱中途ニテ相果テ候フトモ惜ムヘキ命ニ非ス今晚ヨリ明日ニカ
 ケ養生相加ヘ明晩ハ是非敵地ニ蹈入り嗅申スヘシト答ヘケレハ侃世
 斜ナラス喜ヒ懷中ヨリ妙藥並銀錢ナト取出シ相右衛門尉ニ相渡シメ
 デダシメテダシトテ歸リケル相右衛門尉ハ服藥ナト相用ヒ少シ快キ
 方ナレハ翌八日ノ晚佐土原ニ忍ヒ行岩切道秀カ宅ヲ窺ヒケルニ其晚
 ハ念佛講ナリトテ老弱男女群集シケレハ立入ヘキ様ナトアル層ノ中
 ニ匍匐入り隙ヲ窺フ其間ニ絶入ヌルコト度々ナリ暫アリテ念佛ノ者
 共トヨメキ渡テ歸リヌ相右衛門尉即チ道秀ニ對面シ爾々ノ由ヲ尋ケ
 ルニ道秀申シケルハ當方ヨリ其方ヘ攻入申スヘキハ努々沙汰ナキコ
 トナリ諸縣ヨリ此方ヘ結ヒ候テ清武宮崎ヲ只一度ニ攻潰スヘキ旨度

々申シ來レトモ此方モ近頃ハ關東ヘ降參ノ願アル上ハ關東方ナル伊
 東家ト相戦ヒ候テハ降參ノ申シ立成カタシトテ同意申サレヌ然トモ
 諸縣ヨリ是非ニ結ヒ候テ伊東家一个所ニテモ伐取申サテハ協ハサル
 義ナリト申シ來リ候ヘハ黙止カタク覺島ヘ申ワケノ効ハカリニ宮崎
 ノ内一郷ニテモ雜ト家焼ナト仕リ引退ヘシト内談ノ由ニ候其心得ア
 ルヘキ事ニ候サテ又近頃我等カ一黨ノ中ニ伊東家ヘ内通ノ者アルカ
 ノ由ニテ殊ノ外不審ノ端多ク目角ニ立ラレ中々身ノ上六カシク相成
 一家皆迷惑申シ候ヘハ是以後此方ヘ忍ヒ參ラレ候ユト必ス無用タル
 ヘシ且此方ヨリノ注進モ差控エ申スヘシ早トクノ歸リ候ヘトテ是
 マテトハ打變リ酒飯ノ饗モナク興醒ナカラ向後ノ事猶懇ニ頼ミ置内
 ニモ入ス立別レ四五町モ行ケレハ早眼暗ミ足癢ヘ行サキノ路モ分ラ
 サリケル程ニ妙藥ナト服用シ少シ人心ツキケルナカニ平良郷マテヨ
 ロボヒ此所ニ年來披官ノ者アリケル故其家ニタドリ行辨當ナト使ヒ

日ヲ暮シ九日ノ晚宮崎ニ歸リケル侃世ハ相右衛門尉カ陣小屋ニ人ヲ付置今ヤ今ヤト待ケレドモ九日マテモ歸ラサレハ病氣差重リ途中ニテ空ク成タルカ若ハ又敵ノ虜トナリテ先ハレタルヤト拳ヲ握リ片津ヲ吞テ居タリシカ戌亥ノ時分ニハ脉へ兼自身立出テイミ居タル處ニ相右衛門カ歸リ來ルニ不圖行逢ケレハ手ニ手ヲ握リ何如ニヤ何如ニト尋テケレトモ口中乾キ物言フヘクモナケレハ一先内ニ入り湯藥一椀飲テユソ爾々ノ由テ語りケル侃世聞テ限リナク喜ヒ何事モ明日明日トテ歸リケル斯テ相右衛門尉ハ精氣勞レ身體惱ミ變証發シテ重病トナリ頼ミ少ク打臥ヌ侃世深ク之へ傷ミ日夜病床ニ來リ祈療ヲ盡シ飲食ヲ調へ看病ノ體タラク他事ナカリケル誠ニ侃世ノ懇切ハ親子兄弟ト雖モ争カ是ニ勝ルヘキ其効ニヤ漸々回復ヲ得テ其後八十餘日ヲ經三月二十五日ニコソ始テ出仕ヲシタリケリ同上

稻津牛之助カ不覺ニテ佐土原ニ再ヒ村角ヲ燒ル、事

安井相右衛門尉病中ナレハ矢野侃世ハ力ナクモ他人ヲシテ正月十日ヨリ佐土原表ニ嗅物聞テ出シサマノ手ヲ盡シテ探リ聞ト雖モ實説ト覺キユト更ニナシ稻津牛之助申シケルハ先達テ相右衛門カ聞テ歸リタル佐土原ヨリ宮崎近郷ヲ放火セントノ風説モ何事ナカ聞ツラソモ實ニハ非ストテ其用心モナク油斷ノ處ニ相右衛門カ申セシ如ク正月十六日佐土原勢五六十人村角ニ亂入シテ思フマニ放火セリ是ニ因テ宮崎城騷動シテ物見ヲモ出サス米良與兵衛尉長田彦十郎今村治部左衛門尉長田伊賀介ヲ始メ我先ニト驅出ケルカ敵ノ伏兵ニ出合四人共ニヤミノト打レケル其ヨリ味方追々驅出テ戰ハントスルヲ見テ杉田又左衛門尉濱田十右衛門尉道筋ニ立塞リテ敵ハヨキ詰リ詰リニ伏兵ヲ置タルソ粗忽ニカ、ツテハ皆打レナン止レヤ人々ト呼ハリツ、持タル鎗ヲ横タヘ次第次第ニ人數ヲ推分一手ヲ作テ徐ニカ、レト下知ヲナス其隙ニ伏タル敵モ起立榜示今芳士ヲ指テ引退ク杉田又

右衛門尉之ヲ見テ時分ハヨキソ懸レ懸レトイラデケル又右衛門尉十
右衛門尉ハ早敵二人突殺ス逸雄ノ若者共エイエイ聲ヲ揚息ヲモ續セ
ス追懸テ雜兵四人打殺ス然トモ敵ノ退口神妙ナレハ長追シテハ惡シ
カリナントテ榜示ヲ限リニ引反ス此時又左衛門尉十右衛門尉カ一時
ノ機畧ニ非スンハ味方過半敵ノ伏兵ニ打レナンニ二人カ武略ノ程拔
群ナリトノ取沙汰ナリ同上

矢野侃世稻津牛之助ヲ打果サントセシ事

矢野侃世ハ安井相右衛門尉カ物聞ハ前々ヨリ一度モ違フコトナキ故
ニ味方ノ勝利度々ナルニ此度稻津牛之助カ分別ヲ以テ相右衛門カ虛
説ナラント油斷シテ村里ヲ燒ル、ノミナラス味方ノ勇士四人打セヌ
ルコト無念ト云フモ限リナシ左レハ諸縣ヨリ清武ヲ攻取ント云フモ
實説ナルヘシ用心ニ國亡スト云フコトアリ兼テ其覺悟アルヘシト申
シケレトモ牛之助承引セス大様ニ申シケルハ此度敵村角ヲ燒タルニ

味方ノ勇士四人打レタルハ不慮ノ打死是非ナキ次第ナリ却テ敵ヲ追
散シ雜兵共六人打タルハ味方ノ後レトハ存セス又諸縣ヨリ清武ヲコ
ソ心懸ベキナレハ此方マテノ用心ハ餘リ敵ヲ恐ル、ト申スモノナル
ヘシ其上去ヌル九日相右衛門カ佐土原ノ物聞ハ病苦ノ節ニテ中途ヘ
滯留シ其身カ推量物聞ノ由慥ニ存シタル者アリテ告知セシナリ相右
衛門カ言必ス實ト思ヒ玉フナト口ノ利タルマ、左モアリサウニ述ケ
ル侃世聞テ怵ヘ兼己ニ打果スハカリニ思ヒケルカ主君ノ爲ナレハ腹
ヲ押ヘ無念ナカラ歸リケル其ヨリ直ニ杉田又左衛門尉ニ逢テ有シコ
ト、モ語リツ、相右衛門カ重病ヲ深ク歎キケルトカヤ同上
五人ノ士稻津牛之助ヲ謗ル事

一日宮崎城ニテ杉田又左衛門尉猪股左左衛門尉海老原助之丞川越空
左衛門尉松田源兵衛尉同道ニテ矢野侃世ヘ對面シ兼テ安井相右衛門
カ申セシ如ク近日諸縣ヨリ當方カ清武カニ攻來ルヘシト推量申シ候

然ルニ稻津牛之助武勇ノ譽レモナク腰脫ナル諂ヒ者共ノ利口ヲ以テ
當坐ノ聞エ好ク申シ候_テ實ト心得萬事大様ニ申サレ候フコト主君ノ
爲然ルヘカラス候只今體ニテハ敵過急ニ寄來ン時何トナルヘキヤ近
頃モ廻船ヨリ賂ヲ入_レ倭人共ヲ頼ミ中村渡シノ訴訟申シ候ヘハ渡シ船
共願ヒノ通り皆々返シ賜ハリ候只今ニテモアレ近郷ノ川南ヘ敵寄來
ラハ人數ヲハ何ニ乗_テ渡スヘキ能々御分別アレトソ申シケル侃世聞
テ各ノ忠言誠ニ以テ士ノ本意至極ニ候牛之助城代トシテ其器ニ當ラ
スハ我陣代ノ身ナレハ分別アルヘキニ其儀ナク武ノ備ニ怠リタル
ハ恥辱ノ上ノ不忠是ニ過ヘカラストテ涙ヲハラ_レト流シケル五人
ノ者ハ牛之助カ行迹ヲ指テ云ヒシニ侃世我カ身ニ引受誠ニ思ヒ入タ
ル風情ユエ各赤面シテ又申シケルハ牛之助大將ノ器ニ非サルコトハ
我々ニ限ラス諸軍勢モ皆存シタルコトニテ候貴殿御坐候フテ御骨ノ
折ラレ候ヘハコソ宮崎ハ只今マテ敵ニ奪ハレズ候弓矢八幡貴殿ノ御

事ヲ難シ申シテノ儀ニテハ候ハスト苦_クリ切_テ申シケル侃世打笑_テ相
互ニ底意ナキ交リ何カ苦シカルヘキ然シ城代陣代以下諸士タル者ハ
高下コソアレ殿ノ臣下ハ皆同シコトナレハ城代若臆病ナル時ハ其下
知ナクトモ其覺悟アラ_ンコソ武士ノ本意ナラメ各其意ヲ得ラレ一味
同心ノ衆申シ合セ内内不意ノ心懸奉公第一タルヘシ其義ニ付テモ安
井相右衛門カ重病コソ心ニカ、ルナレ各モ能勞リ玉ヘトアリテ酒飯
ノ饗シ悉ニシテ歸シケル是ヨリシテ一味同心ノ二十四人以前ノ通り
寄日ヲ定メ會合シテ忠義ノ穿鑿怠ラス折々相右衛門カ病床ニモ寄集
リ武道ノ吟味サマ_クナリ此侃世ハ血氣偏強ノ人相ニテ暴氣ナルヘキ
人ノ左モナクテ智仁勇兼備ハリ優_クキ心アル良將哉ト諸軍勢ニ至ルマ
テ一入頼母敷思ヒケルトソ_上同

薩人内應敵ノ軍議ヲ泄ス事

慶長六年二月二十四日ノ夜亥刻八代ノ叔木藤七兵衛ヨリ安井相右衛

門尉へ報知來レル趣ハ諸縣諸外城ノ大將衆打集リ評議シケルニ高岡
尼^ニ達ノ城代島津藤四郎申シケルハ舊冬ヨリ正月三日過ナハ清武宮
崎兩城ヲ攻潰スヘキ議定ニテ節季ニハ喜入^レ又八郎モ覺島ニ歸ラレ候^ハ
ニ二月モ末ニナルマテ空ク打過候^ハ何如ニモ口惜キコトナラスヤ佐
土原ヨリハ正月十四日宮崎へ押寄村角ヲ燒拂ヒ剩へ敵數輩打取リ大
勝シタル由即チ脚力ヲ以テ覺島ニ言上アリ當方モ屹度清武ニ押寄稻
津勝五郎ヲ打殺ヘシトナリ諸大將一同ニ此議然ルヘシトアル處ニ穆
佐城代川田大膳亮國鏡申シケルハ伊東殿ハ小勢ナルユエ稻津勝五郎
ヲ始メ昔シ大臣筋ノ士モ今ハ面々初陣ヨリ手ヲ卸シ朝鮮陣以來傷數
ヲ蹈^テ進退利發ナル者多シ其上彼勝五郎今ハ掃部助ト改名シテ威勢
強ク諸卒ヲ掌ノ中ニ入タル由ナリ當家ハ大身ヲ盾ニシテ與力披官ニ
助ケラレ我高名顔ニ人ノ心揃ハス大勢ヲ頼ニ致シ候フユエ一旦ハ強
キ様ナレトモ何角ノ事行届カス毎度ノ懸合ニ鹽ナツケラレ屋形様
島 鹿

謂^テへ面目ヲ失ヒ申シ候殊ニ關東へ御降參ノ上ハ大軍ヲ以テ伊東領ニ
打入シコト覺島表ノ御下知ナクシテハ何如ニ候過ル頃佐土原ヨリ宮
崎へ相働キ候フモ僅カ五十人ノ内外ト聞エ候是ハ稻津勝五郎カ弟宮
崎城代ナレトモ徒者ユエ武道ヲ忘レ油斷ノ處へ不圖打寄一村少々家
燒シ五人カ三人カ斬殺タレトモ矢野侃世ト云フ老功ノ陣代カ下知ニ
テヨキ持者共驅付神妙ニ相働キ却テ佐土原勢ヲ追撃ニ仕リタル由ニ
テ候其ヲ佐土原ノ手柄ノ様ニ申シ候フハ味方左右ト申スモノニテ候
然ルヲ當方ノ若衆羨シク思ハレ掃部助カ守ル清武城ヲ攻潰サンナド
、心易ク申サレ候ヘトモ中々十日二十日ノ内ニハ落マシク候然ラハ
飢肥紫波洲崎宮崎ヨリ後詰アルヘシ其時佐土原ハ毎度ノ約束違變多
クレハ此方ノ助ケニ成難シ覺島ヨリモ國ヲ隔テタレハ大軍出張ハナ
サレマシ左候フテ日ヲ送リヌル其隙ニ乘テ掃部助一命ヲ捨テ、斬^テ
出内外四方五方ヨリ戰ハン最中ニ例ノ田野勢打^テ出テ退口ヲ遮^リ申

日向集 卷之十四
スヘキハ必定ナリ然ル時ハ何レノ軍法ニテ掃部助ヲ打殺シ玉ハンヤ能々評議アラレ候ヘト申ス時ニ肝屬圖書助申シケルハ大膳亮殿仰セ至極尤ニ存シ候然トモ去冬ヨリ當春マテ諸勢著揃ヒナカラ空ク月日ヲ送り候フモ藤四郎殿申サレ候フ通り殘念ノ至リガリ某愚ナル申シ事ニ候ヘトモ掃部助ハ元來大器ノ男ニテ小事ニ心寛ナル者ノ由ナレハ内輪ノ村里ヘハ左ノミ手番ヒ仕ル間敷候ヘハ穆佐ヨリ續キヨキ大塚筋太田中村ヘ人数ヲ出シ彼邊少々家焼シテ早速引取申スモノナラハ覺島ヘノ土産タルヘシ此儀ハ何如ニト申ス時ニ溝口朝鑑申シケルハ一理尤ニ候然トモ彼地ハ曾井宮崎間近キ處ニ候ヘハ家焼ノ煙ヲ見テ老功ノ侃世時ヲ移サス人数ヲ出シ富吉筋ヘ出張仕リ候ハ、味方引取コトナルマシ此難ハ如何ニト申ス圖書助聞テ御不審尤ニ候ヘトモ近頃彼川筋ノ兵船殘ヲス廻船ヘ返シ只今ハ渡シ船一艘ツ、ナラテハ是ナキ由承リ候ヘハ宮崎ヨリ家焼ノ焼ヲ見候フトモ屹度事ノ答ニハ

合申スマシ味方ハ其内足早ニ引取申スヘク候曾井城モ當時ハ頭ナレノ由ナレハサセルコトハ有マシト申シケレハ皆々此議ニ同意アリテ明日カ明後日カ何レ三日ノ内ニ中村口ヘ相働キ申ス答ニ候フ御用心候ヘトナリ同上

島津勢中村口ニ攻來ル事

安井相右衛門尉ハ敵ノ内應ヲ得テ大ニ喜ヒ折好ク侃世ヨリ贈レル行厨アリケレハ殷勤ニ饗シ銀錢ヲト遣シ途中マテ見送り相別レケレハ早子刻過ニナリヌ此時數十日ノ病中初テ歩行シ殊ニ深更ニ及ヒ難儀ナレトモ路次ナレハ杉田又左衛門尉ニ立寄り爾々ノ由ヲ語リケルニ又左衛門尉限リナク喜ヒ今一返聞ントテ再應承リ届ケ其ヨリ直ニ侃世ニ告ントテ立出ル相右衛門尉ハヤウ々歸宅シ平臥ス斯テ又左衛門尉ハ侃世ニ對面シ逐一申シ達シケレハ侃世即テ牛之助ニ申シ談セントテ出ケレハ夜ハホノノト明タリ然ルニ中村ト覺ヘ

テ放火三四個所ニ見ユルスヲ敵ハヤ寄タルソ岩瀬ヲ渡テ富吉へ出テ
敵ノ引取ル路ヲ遮リ打止ヨトテ貝吹立テ下知スル程ニ暫時ノ間ニ二
百餘人集ルト雖ヒ渡リニ舟ナシ其上朝飼ノ認メモセサレハ諸卒進マ
ス我ガナニ舟ヨ筏ヨト聲々ニ呼ハリ時刻ヲ移スハカリナリ敵ハ二十
五日ノ未明兵糧使フテ中村口日柱マテ相働キ思フマ、ニ放火シテ人
數ヲ集メ一ツニカタマリ引取リケルヲ福島彌七郎久米田藤兵衛尉阿
萬金藤後ヨリ追懸喰止ント打テカ、ル敵心得タリトテ大勢一度ニ取
テカエ引包ンテ難ナク三人共ニ打殺シ足早ト引退ク處ニ曾井清武
ヨリ驅付驅付後ヲ慕ヒ大塚原ニテ長嶺喜兵衛尉船カ山治部左衛門尉
眞先ニ追付敵二人打取ケレトモ續ク味方少ク宮崎ヨリモ出張ノ勢ナ
ク殊ニ敵ハ隊伍ヲ亂サス神妙ニ引取ルヲ見テ彼兩人モ打取シ首ヲ提
ケ徐々ト歸リケル事畢テ後侃世ハ大息ツキ獅子ノ齒嚙ヲナシ己一人
ノ恥辱ト思ヒケルニヤ牛之助ニ對面シ今朝中村口ヲ放火セラレ剩へ

目ノ前ヲ安々ト通セシコト末代マテノ惡名ハ白髮ハヘタル侃世カ後
レナリ今日ヨリ陣代ヲ差上ケ隱居申スヘキナリ貴殿モ左様ニ聞届ケ
飢肥清武ニモ然ルヘク御申シ玉ハレ我等ハ今日ヨリ清武ニ罷リ歸ル
ナリト申シケレハ牛之助大ニ驚キ顔ヲ赤メテ申シケルハ此間ヨリ幾
度トナク御助言是アリ候ヘトモ餘人ノ申ス所ヲ金言ト存シ貴殿ノ仰
セテ用ヒス候フ故ニ度々無調法仕リ候今日又船ナクシテ諸勢一度ニ
渡リ得ス後レテ取シユト寔ニ以テ面目ナキ仕合御心中ノ程恥カシク
存スルナリ貴殿陣代ヲ差上玉フニ於テハ某先ツヒ言申上ケ下城仕ル
ヘク候然シナカラ向後御異見ニ隨ヒ申スヘシ是非是非御堪忍ナサレ
下サレヨト一座下テ手ヲ平メヒラニト頼ミケル此上ハ辭スルユ
及ス兎モ角モトテ歸リケル上同
穆佐城代川田大膳亮獨見ヲ陳ル事
其頃穆佐表ノ沙汰ヲ密々承ルニ去ヌル二月二十五日島津勢中村口ニ

寄來ル前ニ諸外城ノ物頭倉岡ニ會合アリテ評議シケルハ此度中村口
ヲ家燒シテ見シニ敵驢キ立動轉センハ案ノ内ナレハ其勢ニ曾井城ヲ
踏潰シ味方其マ、大勢ニテ手固ク相守ルヘシ然ラハ清武ヨリ必ス人
數ヲ出シ戰フヘキノ間其隙ヲ窺ヒ穆佐ヨリ清武城ヲ乘取ンコト易カ
ルヘシ宮崎ヲハ木脇倉岡兩所ノ勢ニテ搦ムヘシ左ヲハ佐土原ヨリモ
餘所目ハナルマシケレハ人數ヲ出サルヘシ然レハ此度中村口家燒ハ
味方ヲ盡シ大勢ニテ相働シニハ若シト云フ時ニ川田大膳亮一人ハ一
圓ニ同意セス申シケルハ總テ軍法ト申スハ先味方ノ諸軍勢上下能思
ヒ合ヒ一人ノ大將名高ク諸物頭能其下知ヲ守リ諸卒又諸物頭ヲ重シ
シテ面々武勇ヲ勵シ一命ヲ輕シ進退皆大將ノ心ノマ、ナル是ヲ指テ
強國ト申スナリ此ノ如ク味方ヲ整ヘテ後敵ノ強キト弱キト勢ノ多少
地形ノ善惡ヲ能見計ヲヒ釣合ヲ知テ敵輕ク味方重キ時ハ敵ノ油斷ヲ
見合セ過急ニ深ク押入ヌレハコソ城ヲモ手易ク乘取リ敵ノ大將ヲモ

打取コトモ有ナリ然トモ只今敵ト味方ヲ校フレハ過半ハ此方輕カル
ヘク候軍勢モ莊内ヨリ來ラス又佐土原ヨリモ出ズハ對々ノ盛リナリ然
ルニ只辨舌ニテ手ニ握ルヤウニ申シタリトモ戰ニナリタラハ其アテハ
違ヒ申スヘシ大膳亮臆病者ユヘ敵ヲ強キヤウニ申スト思食候ハンス
レトモ是マテ面々覺ヘノアル事ニ候其ニ付テ某存シ候フハ深入ノ退
口大事ナルモノニテ候フ間先手足健ナル若者共ヲ四五十人撰リテ其
ニ大將二人相加ヘ未明ニ支度シテ何如ニモ忍ヒヤカニ押出シ三組カ
四組ニシテ一手切ニ相働キ敵若競ヒ來ラハ一度ニ取テカヘシ三方四
方ヨリ打テカ、リ斬棄ニシテ一足モ早く引取テ手柄ト心得一塊ニナ
リテ退クヤウニ申シ含ムヘシ夜ノヒキ明ナレハ敵起出タリトモ果果
シキコトハ有マシ又追々驅來リ候フトモ朝飼ノ兵糧モセサルヘケレ
ハ精力盡テ思フヤウニハ働キ得レ然シテ穆佐ヨリ宮津留富吉ノ間ニ
迎ヒ勢ヲ出シ置追來ル敵ノ勞レタル處ヲ新手ニテ斬崩スヘシ此儀ハ

如何ニトアレハ満座皆尤ナリト同シ左ヲハ一日モ早ク明二十五日ノ朝驅ニ仕ルヘシトテ前條ノ通り中村口ニ寄來リシトナリ上同

黒田如水ノ答書飢肥ニ來ル事

慶長六年正月年始ノ祝儀且ハ日向表ノ様子ヲ告ラレンカ爲ニ黒田如水へ使者ヲ遣サレケル處ニ同二月二十日ノ日附ニテ如水ヨリノ返書來リ萬ツノ事共懇ニ指圖アリ且其書ノ末ニ島津家ヨリ合戦仕懸候ハ身拂ヒハ苦カラスト雖モ此方ヨリ島津家ニ仕懸ラレンコト無用タルヘシトナリ稻津掃部助モ去年ヨリ諸士ノ諫ニ從ヒ諸縣佐土原兩所ヘノ合戦ヲ思ヒ止リシト見エタル處ニ如水ヨリ斯申シ來リケレハ島津領ヘ働キノ儀ハ彌念ヲ斷テ只防戦ノ軍法ノミ吟味アリケル日向記宮崎軍記

安井相右衛門病中間諜ニ出ル事

慶長六年三月十五日矢野侃世ハ安井相右衛門尉カ病床ニ來テ申シケルハ兼テ貴所噂ノ通り彌諸縣ヨリ大勢ニテ當方ヲ攻潰スヘシト企テ

候風説アレトモ虚實サタカナラサレハ其用意モ定メ難ク今日ヨ明日ヨト油斷シテ打過候フナリ若明日ニテモ敵攻來ラハ危キコトナリ諸縣ノ内ニハ兼テ貴所手寄ノ者アルナレハ密々ノ通用ハ何如ニトナリ相右衛門尉答テ某病氣モ日ニ添テ快ク近日出仕仕ルヘク候ヘハ三日ノ中ニハ彼地物聞仕リ候ハン御心安カルヘク候然シナカラ武ノ道急速ナラサル時ハ必ス後悔アルモノニ候ヘハ餘人ニ仰セ付ラレ今晚ニモ嗅セラレヨト申シケレハ侃世斜ナラス喜ヒ縱ヒ三日ハ五日過候フトモ貴所ナラテハ頼ムヘキ人ナシトテ銀錢三十疋三十文ノ事ナリ相渡シ目出タシ目出タシトテ歸リケル相右衛門尉熟々ト思ヒケルハ侃世ニ三日ノ中ト約諾ハシタレトモ若ヤ其内敵寄來ラハ無念ノ至リ後悔ストモカヘルマシ未タ歩行モ心ニ任セスト雖モ今宵コノ雨風烈ク月暗キ幸ニ忍ヒ行ント思ヒ立其マ、出宅シテ八代ニ忍ヒ往キ叔木藤七兵衛ニ對面シ事ノ仔細ヲ承ルニ藤七兵衛申シケルハ明十六日倉岡ヨリ諸外

城大勢宮崎ニ押寄彼城ヲ總乘ニセントノ評議ニテ貴賤老弱皆其用意
夥キコトニテ候此段告申シ度ハ存シ候ヘトモ一手一手ノ頭ヲ定メ又
其下ニハ八人ヲ一組トシテ中々他行ナト思ヒ寄サルコトユエ心ナラ
ス打過候フニ能コソ忍ヒ來レリ然トモ一時毎ニ廻リ番アリテ内外ノ
人ヲ吟味致シ候ヘハ片時モ早ク歸レト云フ相右衛門尉ハ一々聞届ケ
是コソ軍神ノ告ナリト喜ヒ即チ銀錢三十枚相渡シ懇ニ禮謝ヲ陳テ立
出ルニ廻リ番ト覺シキ者ニ行合スレトモ折シモ烈キ雨風ユエ難ナク
忍ヒ歸リ侃世ノ陣屋ニ詣リケレハ早丑下刻ニ成ヌ
宮崎軍記

矢野侃世島津勢ヲ瓜生野口ニ破ル事

矢野侃世ハ臥辱ノ内ヨリ安井相右衛門カ聲ヲ聞太刀ヲツ取テ出向ヒ
貴所ニハ病中ト云ヒ殊ニ風雨ニ打レ深更ニ及テ來ラレシハ何等ノ事
ソト云フ相右衛門尉ハ暫ク息ヲ繼テ爾々ノ由ヲ陳何レニモ明日ハ敵
必ス寄來ルヘキタイニテ何レノ家モ物音高ク火ヲ燒今ヤ今ヤト相待

裝ヒ疑ヒナシト申シケレハ侃世聞テ相右衛門カ手ヲ執リ名酒ナレハ
下戸ナカラ一盞飲レヨトテ手カラ酌テアタヘ又自身モ一盞酌テ申シ
ケルハ今日ノ約束ニモ三日ノ中トコツ申セシニ病中ト云ヒ風雨ト云
ヒ今晚ノ儀ハ比類ナキ忠義言語道斷ニ候其段ハ後ノ事ナリ又明日防
戰ノ軍法ハ何如備ヘ申スヘキヤ心底殘ラス承ラントナリ相右衛門尉申
シケルハ斯様ノ過急ニ遇ヒ味方ノ武備整ハサル時大軍ヲ引請戰ハン
トモハ必ス裏ヨリ崩ルカ多分ハ居負ニナルコト兼テ御存知ノ前ニ候
其上進ムト待トハ諸軍勢ノ強弱格別相變ルヘシ敵大勢來ルヲ知テ進
ムコトヲ得ス臆シテ鄙怯ナル負ヲ致サンヨリハ先ニスルニ勝アリト
申ス言ノ候ヘハ城代ニ談セラレサル後難アリトモ只今貴殿御組ノ衆
ヲ催サレ瓜生野口マテ押詰逆寄ト云フモノニシテ急ニ敵ノ先鋒ヲ打
折カレ候ハ、敵案ニ相違シ仰天スヘシ某等ハ一味ノ者ヲ驅集メ後ヨ
リ追々驅續キ大勢ノタイニ見セ候ハ、二十敵ヲ追カヘシ申スヘク

候敵モシ大勢ニテ勝ニ乗候フトモ某等一味ノ者一命ヲ捨テ、横槍ニ突入ラハ手易クモリ反シ申スヘシ愚案此外ナシトナリ侃世聞モアヘス然々トテ手槍オツ取り兼テ用意ノ兵糧自身腰ニツケテ立出ル相右衛門尉之ヲ見テサテモサテモ早シ早シト稱美シテ城中城外驅廻リ大音聲ニ徇立ケレハ武士共聞付聞付押出ス相右衛門尉ハ道ノ傍小高キ所ニ飛上リ下知シケルハ一足ニテモ早ク侃世ニ追付テ後ヲ黒メヨ侃世ニ追付ナハ其マ、脇ニ開ヒテ備ヲ立ヨ急ケ急ケト教ヘツ、頓テ自身モ驅ケル斯ル處ニ何トカ爲タリケン落合市兵衛尉岩切角左衛門尉ハ侃世ニ先立テ墾田ノ畔ニ伏シケルカ早敵ノ先勢二人打取タリト注進ス味方ノ軍勢勇ミナシ落合淺之助右松少助打續ヒテ我モ我モト驅付ケレハ夥クソ見エニケル敵此勢ヒニ辟易シテ蛛ノ子ヲ散スカ如ク裏崩シテ逃歸ル逃後レタル敵此所彼所ニテ七八人虜リケルカ皆雜兵ナレハ侃世其命ヲ助ケテ追反ス味方ハ其ヨリ人數ヲ纏メ徐々歸リケルカ曉マ

テ降續キシ大雨ユエ諸軍勢皆瀕モ頭モ泥土ニマミレ誰ヲ其トモ見分サレハ薩摩ノ敵ヲ打叩キタル泥棒ナリトテ一度ニ突ト笑ヒケル侃世ノ忠節市兵衛角左衛門カ勇速相右衛門カ武略何レモ名譽ノ武士ナリトテ稻津掃部助ヲ始メ暫ク沙汰ハ止サリケル然ルニ相右衛門尉ハ十六日ノ晩ヨリ病氣再發シテ又々枕ニ伏シケル掃部助牛之助侃世ヲ始メ一味ノ衆ニ至ルマテ何レモ心ヲ傷シメサルハナシ即チ三將ヨリ飛檄ヲ以テ飢肥表ニ言上シ妙藥ナト拜領アリ療養手ヲ盡シケレハ其効ニヤ僅カ一旬ナラスシテ平復シ三月二十五日再ヒ出仕ヲシタリケル上

諸縣郡六外城ノ薩將東長寺ニ會議ノ事

慶長六年三月 原書ニハ三月二十日トアリ然トモ此評議ハ三月十六日瓜生野口ニ寄來ル前ノ事ナレハ二十日ニ非サルコト明ケシ若シハ二ノ字衍ニテ十日ノ誤リナランカト思ハル、ナ島津領諸縣郡ノ内高レトモ因テ考ル所ナケレハ姑ク舍テ後ノ考ヲ待ツ

岡綾本莊八代倉岡穆佐ノ城代ヲ始メ諸士東長寺ニ會合アリテ評議シケルハ屋形様前ニ見關東降參ノ義近日議定ニ相成ヘシ然レハ其

以前ニ清武宮崎ノ間一城ヲ攻取リ屋形様ヘノ忠節ニ致サンハ何如シ
 其ニ付テハ宮崎清武兩城ヲ一時ニ攻ヘシ先川北ノ内本莊倉岡ヲ穆佐
 ニ相加ヘ清武ノ攻手トシ此二手ハ西北ノ二口ヨリ押寄只一時ニ攻登
 ヘシ城兵二口ニ集リ防キ戰ハシ最中ニ穆佐勢裏ニ廻リ東ノ口ヨリ打
 入、ハ敵必ス騷動スヘシ其時三方ヨリ突ト攻入モノナラハ城ヲ攻取
 コト手ノ中ニアリサテ又高岡一手綾一手八代一手此外集リ勢一手合
 テ四手ノ勢ハ宮崎ノ攻手ト定メ是ヲ一手ノヤウニ備ヘ急ニ押寄一方
 ヨリ攻入テイニ見セ俄ニ分レテ四方ヨリ一度ニマクリ立テ攻登ラハ
 是モ手易ク攻落スヘシト衆議一決シテ左ラハ今月十六日 原書ニハ二十
 六日トアリ然
 トモ前條ヲ案スルニ是月二十六日ハ宮崎城ニテ諸士ヲ饗セシ日ニテ合戰ア
 リシコト見ユス其下文ヲ案スルニ此評議ハ即チ瓜生野口ニ寄來ル時ノ事ナ
 リ瓜生野口ニ寄來リシハ前條ニ見ユシ通り未明ニ清武ノ攻手千八百人宮
 崎ノ攻手千八百五十人都合三千六百五十人ノ着到ニテ兩城ヲ只一時
 ニ攻潰サントノ義ナリ時ニ穆佐城代川田大膳亮並足輕頭村岡舍人助

馬渡仲兵衛等申シケルハ清武宮崎共ニ要害堅固ノ名城ナリ殊ニ清武
 城ニハ稻津掃部助ヲ大將トシテ山田匡得ヲ始メ平部平川右松川崎壹
 岐黃柳堀堤落合甲斐田中大内宮田ナト云フ伊東譜代武功ノ士共飢肥
 ヨリ代在番シテ丈夫ニ相守ル由聞エタリ宮崎城ニハ掃部助カ弟城代
 トシテ矢野侃世ト云フ智謀ノ陣代在番シテ海老原川越阿萬荒武安井
 ナト云フ一騎當千ノ士共諸卒ヲ下知シテ晝夜油斷ナク相守リ進退急
 速ナル故ニ當方ニモ佐土原ニモ度々鹽ヲツケ其上隙ヲ窺ヒ當方ヲ攻
 取ント相議スル由風聞ス斯ル六カシキ敵城ヘサセル方便モナク手引
 ノ者モナク只強攻ニ攻落サントレ玉ヘトモ左様ニ手易クハ攻落サル
 マシ第一合戰ノ道ハ敵ノ油斷ヲ撃テコソ勝利モアルモノニテ候此義
 ハ各御存知ノ前ナレハ新ク申スニ及ス候サフシテ軍ハ三等ノ選ヒア
 リ天ノ時地ノ利人ノ和是ナリ然ルニ來ル十六日ハ 原書ニハ十六
 日ニ作ル甲子ノ
 日ナレハ天ノ時大凶ナリ地ノ利ヲ申セハ猶以テ堅城ナリ人ノ和ヲ申

セハ敵ハ一致シ味方ハハダナリ斯テハ一事モ勝ヘキ理ナシ甲子
ハ支干ハ始メニテ天開日ト申シ專ラ仁惠ヲ施シ凶器ヲ忌ム殊ニ壁宿
ニ當テ千滅日東ヘカ、ツテ大敗日ナレハ大惡日ナリ勝ヘキノ道アリ
テモ時ノ勢ニ因テハ思ハス後レテ取ルコト軍ノ常ナリ然レハ先、弓箭
ヲ戢メ和睦ヲ調ヘ互ニ通用シ能々敵ノ虛實ヲ考ヘ敵油斷シテ撃ヘキ
ノ虛アラシク時其虛ニ乘シ方便ヲ以テ不意ニ押寄ナハ勝利アルヘシ能
々御評議アレト苦リ切テ申シケルニソ一座典醒、一句ヲ繼ク者モナク
然ラハ此評議重テ相決スヘシトテ皆々退出シケルカ諸外城ノ足輕大
將何レモ其夜直ニ高岡尼カ達ニ參會シテ評議シケルハ穆佐ノ者共ハ
辨舌ヲ以テ敵ノ強キコトノミヲ陳、臆病ヲ構ヘ忠義ヲ知サル者共ナレ
ハ味方ニテ味方ニ非ス多分伊東家ヘ志アリト見エタリ彼等ヲハ差除
キ川北ノ勢ヲ以テ彌來ル十六日原書二十六日ニ作ル宮崎ヲ攻取ルヘシトテ即
テ脚力ヲ飛シテ其趣ヲ覺島ニ言上ス其序ニ穆佐川田カ一手伊東家ヘ

内通ノ志アル由讒言セシトナリ既ニ十六日原書二十六日ニ作ルニナリケレハ
諸縣郡川北ノ諸大將軍勢ヲ催シ宮崎ヲ攻取ント出陣セシ處ニ瓜生野
口ニ於テ不慮ノ敗北前ニ見エタリシケレハ益、川田カ一手ノ恥、惡ンテ覺島ニ
讒言セリ同上

川田大膳亮スガ骸ノ上ニテ冤罪ヲ雪ントセシ事

高岡ヨリノ飛脚覺島ニ達シケレハ穆佐川田カ一手當家ヘ内通ノ實否
ヲ糺サン爲ニ覺島ヨリ新納又八郎ヲ遣サル又八郎ハ莊内勢少々驅、加
ヘ同月二十六日ノ晚高岡ヘ到着セリ然ルニ今度諸縣郡川北ノ勢瓜生
野口ニテ敗北ノ節穆佐ヨリハ援兵ヲダニ出サ、レハ伊東家ヘ内通疑
ヒナシトテ其アラマシ又八郎ヨリ覺島ニ注進セリ此事川田方ヘ洩レ
聞エケレハ大膳亮士卒ヲ招キ歎ヒテ申シケルハ忠カ不忠ニナルコト
古今濁レル世ノ習ヒ是非ナキ次第ナリ新納方ヨリ覺島ニ言上ノ上ハ
此事詞ニテ申シ開シト難カルヘシ所詮伊東領分ヘ押寄勝負ニ拘ハ

城ニテ諸士ヲ饗スル後ノ事ナレトモ
前段ヨリノツ、ギナル故ニ此ニ録ス

日向纂記卷十四終

日向纂記卷十五

宮崎城ニ於テ諸士ヲ饗スル事

慶長六年辛丑三月二十六日宮崎城ニ於テ稻津牛之助矢野侃世諸軍ヲ
殘ラス招キ集メ面々ノ軍功ヲ勞リ且懇ニ酒飯ノ饗應アリ終日ノ酒宴
賑カナリケレハ諸軍彌勇ミナシケル斯テ夜ニ入り落合淺之助右松
少助落合市兵衛尉岩切角左衛門尉堀次郎兵衛尉川越奎左衛門尉阿萬
角之丞齊藤仁右衛門尉日高源左衛門尉川越太郎兵衛尉田爪又左衛門
尉松田源兵衛尉海老原助之丞安井相右衛門尉彼此十四五人ヲ密カニ
招キ牛之助侃世列坐ニテ申シ達シケルハ去十六日瓜生野口過急ノ出
張ニテ味方將ヲ紊スヘキノ處各群ヲ拔ンテ神妙ニ働レ候フユエ不慮
ニ大敵ヲ追拂ヒ名譽ヲ顯シ比類ナキ忠節ノ段感悅是ニ過ス其趣即テ
飛檄ヲ以テ飢肥表ニ言上申シ候ヘハ先以テ時ノ褒美然ルヘキ様ニ吾
等兩人ニ計ラヒ申セト御書ノ趣是々拜見アレトテ銀錢三百枚銘々ニ

配分セヨトテ相渡ス何レモ頂戴シ有カタキ旨一同ニ申述退出セント
ス時ニ牛之助申シケルハ島津家ヨリ諸縣郡ノ勢ヲ以テ是非宮崎清武
兩城ニ一城ハ乗取スヘシト齒嚙スル由今ニ於テ風説隠レナク候敵此
度ノ後レニ因テ彌此事ヲ思ヒ立ヘシ然レハ各油斷ナク其覺悟頼入由
殷勤ニ述ケル落合淺之助進ミ出テ、云フ島津殿關東ニ降參アルユエ
ニ當家トノ弓箭差留ラル、旨沙汰アル由ニ候ヘトモ内實ハ覺島ヨリ
兩城ニ一城ハ是非攻取候様ニ下知申サレ候フユト紛レナシ其故態ト
諸縣郡諸外城ノ郷士共我意ヲ以テ屋形ノ下知ヲ用ヒス相戰フタイニ
モテナシ空知、スシテ後日關東ヘ申シワケノ種子ト推量仕リ候然レハ
天下一統仕ラサル内ハ諸縣郡ノ敵共一揆ノヤウニ蜂起シテ幾度モ不
意ニ寄來リ申スヘク候去ル十六日ノ戰ヲ以テ考ヘ合セ候フニ是ヨリ
後ハ味方ノ勢ヲ三十カ五十カ一手一手ヲ組兼テ清武ト合圖ヲ定メ置
敵不意ニ寄來ル時中途ニ出合ヒ南北ヨリ驅ツケ夾ミ戰フヤウニ備ヘ

置玉ハ、又此度ノ様ニ味方追々驅付後、先ヨリ打入候テ縱ヒ十倍ノ敵ナ
リトモ大抵打勝申スヘシ左モナクテ敵ノ猛勢城下ニ寄來ルマテ其マ
、ニテ城ヲ守リ居候ハ、大勢急ニ攻登リ危キコトモ候ハンカト存ス
ルナリト辨舌爽カニ述ケル滿座アツハレノ軍法哉ト稱美ス侃世ハ兼
テ安井相右衛門尉カ籌算セシ後言ナレハ相右衛門尉何ト申スヘキヤ
ト思ヒ屹ト相右衛門尉カ顔ヲ見ルニ相右衛門尉少モ争フ眼色ナキ故
ニ侃世取アエス淺之助殿御軍算一入感シ入テ候フナリ扱各ハ何ト思
ハル、ヤ面々私ヲ捨テ遠慮ナク主君ノ爲筋ヲ申シ出テラレヨトナリ
一座ノ諸士一同ニ此上存寄毛頭是ナシト云フ海老原助之丞安井相右
衛門尉モ詞ヲソロヘテ淺之助殿手段拔群ニ存シ候片時モ早ク手組合
四等御定メアリテ宜シカラント申シケルニソ即テ牛之助下知ヲ以テ
備ヲ定メ置キ侃世ハ翌二十七日淺之助相右衛門尉助之丞同道ニテ清
武ニ差越掃部助對談ノ上軍法委曲ニ相定メ宮崎へ歸リケル

宮崎
軍記

安井相右衛門尉敵ノ動靜ヲ探ル事

慶長六年四月初佐土原並諸縣郡諸外城殘ラス又山ヨリ西莊内八萬石南ハ櫛間マテ十三ヶ所都合八千餘ノ勢ヲ以テ飢肥清武宮崎此三城ヲ只一時ニ攻落スヘシ伊東家サヘ滅亡セハ高橋秋月ハ元ヨリ島津ノ旗下ナルユエ日向一國殘ル所ナク薩摩ノ領分タルヘシ天下未タ落着ナキ内ニ攻取ルヘシト企ル由聞エケレハ敵方所々ヘ物聞ヲ入レ嗅シメラル、ト雖モ慥ナルコト相分ラス櫛間ヨリハ其事曾テ是ナシト云フ木脇ニテハ穆佐城代川田大膳亮以下逆心ノ聞エアリテ近頃大膳亮寔島ニ召籠ラル、ニ因テ穆佐騷動セシ趣ハ聞ユレトモ此外ニハ差當リ軍ノ沙汰ナシト云フ佐土原ノサナリヲハ安井相右衛門尉ニ承リ候ヘト稻津牛之助ヨリ申入ルト雖モ相右衛門尉辭シテ云フヤウ某カ兼テ手寄ノ者モ近頃ハ通用堅ク無用ナリト毎度嚴ク申シ來リ候ヘハ只今忍ビ行候フトモ對面タニ協フマシケレハ如何シテ直説ヲ承ルヘキヤ牛之

助聞テ然ラハ八代ノ手寄ハ如何トナリ相右衛門尉其ハ既ニ早別人ヲ以テ探ラセラレ川田大膳亮カ逆心ノ騷動ト聞届ケラレ候フ上ハ某別段承ルニ及マシト辭ス牛之助モ重テ申スニ詞ナク又モ内談スヘシトテ其ヨリ直ニ矢野侃世ヘ内談アルニ侃世云フ相右衛門申ス所其理ナキニ非ス此上強テハ申シ難ケレトモ某少シ存寄ノ候ヘハ相右衛門ヲ此方ヘ招カレヨトテ相右衛門ヲ召寄セ平松蓮光寺ノ方ヲ聞合セラレシコトハ出來マシキヤト云フ相右衛門申シケルハ彼地ハ敵地間遠ク候ヘハ三日カ五日カ滯留仕ラハ聞合出來申スマシ侃世五日ハ七日ニナリ候フトモ苦カラス何事モ貴所宏才次第頼ミ入トテ銀錢五十目相渡ス牛之助モ大慶是ニ過ストテ酒飯ナト饗シ銀錢三十目是ハ平松滯留中ノ用ニセヨトテ相贈ル時ニ四月六日相右衛門尉ハ直ニ打立テ平松郷ニ至リ住持賢如ニ對面シ其夜ハ終夜四方山ノ話天下錯亂ノ物語リナトシテ互ニ打解翌朝暇乞ノ序ニサテ島津家ヨリ伊東家ヲ絶サン

トテ日州四家ニテ八千餘ノ大勢ヲ催シ飢肥清武宮崎ヲ只一時ニ攻潰
スヘシトノ企テアル由然レハ吾等一族共殘ラス打死仕ルヘク候ヘハ
代々氏ノ如來様ヘ今生ノ暇乞申シアケ來世ハ修羅ノ苦患ヲ免レ上品
上證ヲ遂ケサセ玉ヘト誓願ノ爲貴僧ニモ現在ノ御對面是マテ存シ
參向仕リ候フ由涙ト共ニ申シ陳御調荷ナリトテ銀錢五十目差出ス住
持モ熟々聞テ袖ヲ絞リケルカ相右衛門尉ヲ内陣ニ誘ヒ佛前ニ頓首シ
念佛廻向畢テ申シケルハ昨朝岩切道秀此ヘ參ラレ候序ニ貴所ノ噂申
サレ候是マテ親類相互ノ爲テ存シ態ト音信不通ニ致セトモ佐土原ト
飢肥殿トノ儀ハ朝鮮陣以來兄弟ノ契リ淺カラス候フ處ニ佐土原殿ハ
關原ニテ打死メサレ飢肥殿ハ大阪ニ於テ十死一生ノ御煩ヒト相聞エ
候フカ中務殿御書置ニモ子々孫々ニ至ルマテ伊東家ト和睦ノ事ヲ御
遺言アリシナリ然ルニ諸縣ノ者共薩摩ノ屋形ヲ笠ニキテ佐土原ヲモ
手下ニ仕リ様々難題ヲ申シ懸候フユエ只今ハ却テ彼方ト不和ニ相成

候向後ハ以前ノ通り飢肥殿ト一味アリ一偏ニ關東方ナサルヘシトノ
事ニ候ヘハ佐土原ヨリ其表ニ出張アラソト思ヒモ寄サルコトニ候
御屋形モ最早關東御一味ノ願相濟秋月高橋兩家モ關東降參ノ由ニ承
リ候左候ヘハ元ヨリ關東御味方ノ伊東殿ヲ攻潰サレナハ關東ヨリ其
マ、ニテ召置アルヘキヤ推量モアルヘキ事ナリ八千ノ勢ハサテ置八百
モアルマシク候ヘハ虚説ト思ハルヘシ但シ川南ノ穆佐ト川北ノ者共
内輪錯亂ヲ起シ様々ノ雜説流行申シ候必ス危ミ玉フコトナク安心致
サレ候ヘ向後ハ以前ノ通り相窺キ其表ト互ニ往來モ致スヘシト悦ヒ
存スルナリト云フ相右衛門尉喜ヒ寔ニ以テ親類ノ好ヲ忘レ玉ハス眞
實ノ御物語リヲ承ルナリ然ルニ於テハ今日此ヘ滯留仕リ今晚彼方ヘ
參リ候フテハ何如ト云フ住持幸ヒ明朝佛事ニツキ愚僧今晚ヨリ彼地
ヘ差越候ヘハ同道仕ルヘシト云ケレハ相右衛門尉大ニ喜ヒ誠ニ以テ
如來ノ御引迎ナラントテ住持同道ニテ佐土原ニ至リ道秀ニ對面シ互

ニ膝ヲ交ヘ談話ノ中ニ賢如上人云々ノ物語リアリケル道秀申ケルハ
仰セノ通り天下一統關東ニ歸シテ覺島表モ御一味ノ願相濟候ヘハ
肥殿トモ彌和談ニ相決シ是以後軍ノ取結ヒ曾テ以テ無用ノ由覺島ヨ
リ追々申シ來リ和睦^{ワカ}ヒノ爲ニ深歲善哉坊近日清武ニ差越サル、答
ニ候ヘハ伊東殿ト矛盾^{ムジク}ノ争ヒ申サルベキヤウ是ナク候然シナカラ川
南ノ穆佐ト川北ノ高岡ト不熟ノ義出來シ只今魔島ニ於テ穿鑿相始リ
穆佐ノ川田ト高岡ノ本田ト對決最中ニ候フユエ彼地ノ者共身免レ申
ワケノ爲ニ面々我意ヲ以テ清武宮崎ヘ相働キ申スヘキカ是ハ一揆ノ
類ニテ手應ヘ申ス程ノ事ハアルマシ清武宮崎ヨリ出合^{出合}踏遣サレナハ
其マテニテ頭ヲ出シ申スマシ八千ノ勢ヲ以テ總攻ト申スコトハ毛頭
是ナク候是ハ高岡ヨリノ雜説ニテ伊東家ヲ脅サントノ童沙汰ニテ其
義ハ心安ク存シ候ヘトテ如來ヲ證據ニ立テ語りケル相右衛門尉聞テ
御懇切身ニ餘リ忝キ御物語リニ候左ラハ杯仕ラントテ銀錢二十日相

贈リ酒興事終リ暇乞シテ立別レ上那珂下那珂邊所縁ノ者ニ立寄銀錢
遣シ尋テケルニモ大概同シ話ナリ其夜ハ平良ノ長野某カ家ニ一宿シ
翌九日ノ朝廣原筋ヲ嗅廻リ石塚新左衛門カ家ニ立入ケレハ新左衛門
云明十日高岡ヨリ宮崎ニ相働クヘキ由ニテ吾等甥倉岡ノ粗木藤三郎
只今爰許ヲ急キ罷立候其トモ知ス彼方此方徭徻致サレ候ヤ早々罷歸
ラレヨトナリ相右衛門尉懇ニ一禮ヲ陳銀錢ナト遣シ猶又委細ニ相尋
テ急キ宮崎ニ馳歸リケル

同上

高岡勢宮崎城ニ攻來ル伊東勢柳瀬ニ逆寄シテ勝利ヲ得ル事

安井相右衛門尉ハ宮崎城ニ歸テ敵ノ様子ヲ稻津牛之助ニ申シ達シケ
レハ矢野侃世ハ相右衛門カ辭ノ内ニハヤ脚力ヲ清武ニ飛シテ稻津掃
部助ニ注進ス且相右衛門尉海老原助之丞杉田又左衛門尉ハ一手ノ衆
一兩人同道ニテ今晚倉岡ヘ忍ヒ行イヨク敵寄來ラハ柳瀬墓所ノ尾
ニ狼煙ヲ擧テ合圖セラレヨトナリ三人ハ畏リ即座ニ兵糧用意シテ打

立ケルカ早柏田ニテ夜ニ入りヌ松田源兵衛尉小田原總右衛門尉彼是
五人柏田ニテ合圖ヲ定メ倉岡五个所ニ忍ヒ入り嗅廻リケルニ紛ル所
モナク皆軍ノ用意ト見エテトヨメケルニソ五人共ニ約束ノ處ニ集
リ相窺フ内ニ短夜ナレハ白々ト明タリ即チ侃世ヘ約束ノ通り狼煙ヲ
細ク一ツ擧タリ宮崎ヨリ是ヲ承テ二ツ擧レカハ清武ニ三ツ擧ル五人
ノ衆今ヤ今ヤト相待テトモ敵來ラサレハ叔ハ狼煙ヲ咎メタルニヤト
片津ヲ吞ンテ遠見セシ處ニ敵頭簇リ見エタリスハ必定ナルソト喜ン
テ猶林中ニ匿レ伏シ居タリ宮崎城ヨリ未ダ合圖ノ煙ヲ見サル内ニ堀
次郎兵衛尉岩切角左衛門ヲ始メ長野甚兵衛尉安藤新左衛門尉橋口角
左衛門尉長嶺内記鬼塚左衛門尉津曲三右衛門尉等八人ハ先懸テ志
シ驅出ケルカ中途ニテ合圖ノ煙ヲ見息ヲキツテ馳ケル程ニ柳瀬ニテ
以ト敵ニ行逢ヒケレハ一番槍ヲ合セ突ツ突レツ勝負未ダ分ラサル處
ニ堤五左衛門尉黃柳善左衛門尉壹岐與右衛門尉瓦林金左衛門尉青山

七兵衛尉川越左衛門尉谷口少右衛門尉黒木將監梁瀬鐵右衛門尉等
九人ニ番ニ横合ヨリ斬崩ス味方續ク勢少ク敵ハ後ヨリ大勢競ヒカ、
ツテ味方已ニ敗北ト見エケレハ最前ヨリ林中ニ忍ヒ居タル又左衛門
尉相右衛門尉兼太刀引拔驅出ントス助之丞押止メ云フヤウ此大敵
ノ中ニ吾等五人打テ出テタリトモ何程ノ事チカ仕出サン某一ツノ計
アリトテ腹ニ巻タル旗二流レ取出シ竹ニ結ヒツケ墓所ノ尾ノ高キ所
ニ差上ケ且煙ヲ夥ク擧タリケレハ敵之ヲ見テ敵ハ早後ニ廻リヌ取截
レテハ惡リナント云聲シケル處ニ清武ヨリ山田土佐入道匡得ヲ始メ
猪股又左衛門尉落合五郎兵衛尉三百餘人引率レテ旌旗差上ケ有田郷
マテ驅ツクル敵ハ前後左右ヲ取卷レ騷キ立タル處チ一番槍ノ十七人
一手ニ成一文字ニ突崩ス味方ノ勢ハ猶モ後ヨリ追々驅付関ヲ作テ押
來リケル程ニ敵一支モセス倉岡サシテ敗北ス黃柳善左衛門尉川越左
左衛門尉谷口少右衛門尉梁瀬鐵右衛門尉鬼塚將監等五人ハ早首取テ

出タリ其外味方ノ諸卒勝ニ乘リ右往左往ニ追カクル助之丞又右衛門尉相右衛門尉源兵衛尉總右衛門尉五人ハ逃ル敵ニハ目モカケス道ノ左右ヲ驅廻リ追行味方ヲ制シツ、合圖ノ旗ヲ立タルソ早ク旗ノ下ニ集レト下知ヲナシヤウ、諸卒ヲマトメ其ヨリ徐ニ歸陣セリ其日ノ戰味方ハ堀次郎兵衛尉岩切角左衛門尉兩人槍劍刀創二三个所負シカトモ頓テ平愈ス其外ニハ手負打死一人モナク敵ハ難兵共二十六人打取テ其日宮田久左衛門軍配凱歌ヲ執行セケル同上

穆佐勢細江ニ攻來ル六人ノ番衆引地ニ逆寄シテ勝利ヲ得ル事慶長六年五月六日ノ晚細江ノ番衆平島八左衛門尉赤目權之丞谷口仲右衛門尉多田與左衛門尉和田彌兵衛尉井上伴左衛門尉等參會シテ軍物語リ區々ナル處ニ的野ノ倉永主水左衛門ト云フ者來テ申シケルハ明七日穆佐勢殘ラス此表ニ攻來リ番衆ヲ打取カ又ハ面々打死スルカニツニ一ツト覺悟ヲ定メ候ヒヌ是ハ此節覺島ニ於テ川田大膳亮殿逆

心アルカト疑ヒアリテ高岡ノ本田殿ト對決アリケル故ニ逆心ナキ旨申譯ノ爲ト聞エ候是ハ川崎良真ト云フ道心者カ話ニテ候能々用心候ヘトテ即テ立歸リケル六人ノ番頭如何センヤト評議ノ處へ清武ヨリ猪股又左衛門尉落合五郎兵衛尉荒武五郎左衛門尉崎田助左衛門尉四人廻リ横目トシテ來リケルカ又左衛門尉申シケルハ是マテ宮崎ノ味方共小勢ヲ以テ度々大敵ニ打勝シハ毎モ逆寄ノ方便ナリ然レハ伴左衛門尉ヲ案内者トシテ明朝未明ニ穆佐へ押寄急ニ戰ハ、味方必ス勝利ヲ得ヘシ此義何如ト云フ何レモ一同ニ尤ナリト勇ミテ早速兵糧ヲ使ヒ忍ビノ事ナレハトテ伴左衛門尉ヲ案内者トシテ有合フ其勢四十八人選リ出シ後ノ事ハ四人ノ衆裁判アレト云ヒステ、夜モ未タ明サレハ的野ヲ越テ徐々ト押行ケル又左衛門尉等四人ハ脚力ヲ以テ清武ニ注進シケルハ四人ノ者共モ農兵郷民カリ催シ後ヨリ出勢仕リ味方ニ力ヲ割申ス也細江ハ空虚ニ候間番勢ヲ差越サルベキヤ否ト申

シ遣シ即チ面々モ六人ニカチ副ントテ農兵郷民七八十人驅リ催シ後陣ニツ、ヒテ押行ケル處ニ先手ノ勢ハヤ穆佐口引地ニ至テ敵頭カ爪カニ見エタリ敵ハ九十餘人ヲ三手ニ分ケ二陣ハ谷ヲ隔テ、遙ニ後レケルカ先手ノ大將村岡舍人助馬渡仲兵衛兩人味方ノ勢ヲ見テ足ヲ止メ敵カ味方カト危ム處ヲ時分ハ好ソカ、レトテ會釋モナク打テカ、ルスハ敵ナルソト云ヨリ早ク味方ノ先手究竟ノ者共ナレハ無二無三ニ斬立ケル程ニ穆佐ノ組頭村岡舍人助ヲハ平島八左衛門尉打取ル其弟千左衛門ヲハ谷口仲右衛門尉打取ル物頭馬渡仲兵衛ヲハ赤目權之丞打取ル此仲兵衛ハ隱レナキ神影流劍術ノ名人ナルカ運ノ盡ニヤアヘナク權之丞ニ打レヌ仲兵衛カ披官ヲハ和田彌兵衛尉打取ル舍人助披官ヲハ多田彌左衛門尉日向記彌左打取ケル斯ク一番ニ大將從者打レヌル上ハ支ル敵一人モナク山路ヲ指テ退散スレハ味方モ勢ヲ收テ細江ニ引取リケル此度六人ノ手柄比類ナキ高名ナリトテ羨サル者ノナシ

上同

穆佐口引地ノ迫合優劣評判ノ事

穆佐口引地ニテ迫合ノ後ハ軍ノ沙汰モナカリケルカ徒然ノ餘リ清武宮崎ノ諸士思ヒ思ヒニ引地ノ迫合ヲ評シテ云フ六人ノ番頭共敵ヲ擊ハ撃タレトモ清武口大切ノ守リ所ヲ明除テ敵地ニ出張セシハ不覺ナル舉動ナリト云フモアリ又或ハ高岡倉岡木脇ハ大河ヲ隔テタレハ不意ニ寄來ル氣遣ヒナシ差向穆佐勢攻來ルヲ聞ナカラサセル要害モナキ場所ニ待受テ戰ハンハ謀ナキニ似タリ元來小勢ナレハ細江ヲ捨置キ番勢殘ラス出張セシハ尤ナリト云フモアリ或ハ五郎左衛門尉又左衛門尉五郎兵衛尉助左衛門尉四人ハ廻リ番ノ横目ナレハ一人ハ清武ニ馳歸リ早ク掃部助ニ達スヘキ義ナリ一人ハ細江ノ番所ヲ守ルヘシ二人ハ農兵郷民ノ内半分ハ番人ニ殘シ其半分ヲ引ツレ後ヨリ胴勢トナリテ追ツクヘキ事ナルニ四人ナカラ出張セシハ兼テ武道ノ詮議薄キ

故ナリナト區々ノ評判止サリケル矢野侃世此事傳へ聞テ一日川越左衛門尉杉田又左衛門尉岩切角左衛門尉海老原助之丞安井相右門衛尉ヲ招キ此度穆佐口追合ノ評判區々ナリト聞ケリ各存念ノ程承リタシトナリ五人ノ士一同ニ申シケルハ弓箭ノ道ニ限ラス總テ事ノ過タル迹ハ申シ易キモノニテ候先手柄穿鑿ノ義ヲ申サハ虎口前大事ノ時一番槍ヲ突テ勝負未タ分ラサルニ敵ノ虛ヲ見透シ命ヲ捨テ、突ト斬崩スヲ比類ナキ手柄ト申シ候其外優劣甲乙サマク是アルベク候又敵味方戰ハサル前ニ能ツリ合テ考ヘ戰テ十、二十勝ヘキ手段ヲ設ケ時ト所ト位トノ三ツヲ能見合セ味方ヲ一致セシメ敵ニ因テ轉化シ勝利ヲ得テ武功ノ大將ト申スヘシ又合戰ノ時思ハス味方敗北シテ敵ニ追撃ル、時蹈止リ殿シテ多クノ味方ヲ助ケ追留ノ手段ヲ設ケ自身手ヲ下シ戰テ敵ノ追來ラサルヤウニ計テ徐々ト引取ルヲ天下第一ノ高名ト申スヘク候其人ニ從テ働ク士卒ヲ勇氣者ト承リ及ヒ候是ヲ以テ

此度ノ甲乙ヲ論シ候ハ、又左衛門尉カ一言ニテ六人ノ番衆勇氣ヲ勵シ候ヘハ手柄トハ申スヘシ武功トモ高名トモ申シ難ク候ハンカ武道ノ詮議大事ノモノニテ候フ間極テ申シ述難ク候フト云フ侃世聞テ扇ヲサツト開キ立アガリ鳴ルハ籠ノ水日ハ照セトモ絶ヘス堪タリ御代ハ萬歳武士ハ五人ト舞納テ酒宴深更ニ及ヒシトソ上同
私史氏曰勝敗之理不必係衆寡也慶長中我屢與薩人戰雖迭有輸贏我師每多利夫我之於薩言衆不足以當其十一言城不足以捍其一面言兵甲不若其堅利而猶能與之抗蓋當是之時公新復國厲精圖治而諸將亦臥薪累年抑情忍詢志在恢復故其心和而其謀協其力一而其鋒銳以薩人之衆且強輒挫於我者實由此也嗚呼嚮使我君臣早有此心則豈猝有天正之難哉惜夫

報恩公大阪ニ於テ卒去ノ事

報恩公ハ慶長五年十月十一日年四十二ニシテ大阪樓ノ岸ノ邸ニ卒セ

ラル世子左京亮祐慶公幼年ニシテ宮崎合戦最中ナレハ味方ノ勇氣折ン
ユトナ恐レテ附副參ラセシ家老落合九右衛門尉等深ク之ヲ秘シ病氣
ノ體ニモテナシ明ル六年ノ三月ニ至テ始テ卒去ノ旨ヲ披露シ葬式ヲ
營ミケル法號ヲ報恩寺殿心關宗安大禪定門ト云當家中興ノ君ナレハ
國中ノ諸士ハ云フニ及ハス賤キ下民ニ至ルマテ父母ヲ喪ヘル思ナ
セリ時ニ世子年十三ナルカ同年四月上洛アリテ東照公ニ謁見アリ明
ル慶長七年四月十日從五位下ニ叙セラレ修理大夫ニ任セラル
日 向

東禪公島津家ト和議ノ事

慶長五年關原合戦ノ後天下モ大カタ鎮リケレハ黒田如水ノ指圖ニ從
ヒ同六年島津家ニ和談ノ義ヲ申シ入ラレケル處ニ同年五月八日島津
家ヨリモ和談取結ヒノ爲ニ深歲善哉坊ヲ使僧トシテ舟曳八幡ニ來着
セシメラル稻津掃部助兼テ借屋原甚右衛門尉ニ命シテ此度和談ノ義
ニツイテハ島津家ヨリ定テ難題ヲ申カクヘシ左レハ貴殿使僧ニ出會

ノ上機ニ臨ミ變ニ應シテ宜キニ計ラハレヨト申シケレハ甚右衛門尉
其意ヲ承テ應接シケルニ案ニ違ハス善哉坊ヨリ此度和睦ニツイテハ
先規ノ通り一个所ヲ割渡サルベキヤ其段承リ候フ上ニテ和談取極メ
申スヘシト云ヒケレハ甚左衛門尉答テ申シケルハ主人豊後守事朝鮮陣
中加徳島ニ於テ兵庫頭殿ト御入魂ノ上互ニ神文ヲ取換サレ候ヘハ此
方ヨリハ其意ヲ守リ少モ違變ノ義候ハシ尤天下亂劇ニ付時ノ忠節ト
シテ高橋領分宮崎城ヲ攻取候ヘハ御加勢ヲコソ下サルヘキニ左ハナ
クテ却テ軍勢ヲ差出サル、ニ因テ時ノ身遁レニ數个度合戦ニ及ヒ候
然トモ是ハ麗島ヨリノ御下知ニテハ候フマシ定テ外城ノ計ヒタルヘ
シト此方ニハ少モ遺恨ニハ存セス候フ處只今ノ御口上筋違ヒナリト
申シケレハ善哉坊モ一應ハ種々辨論シタレトモ兎角ツマフヌ辭ノミ
ナレハ先御歸リアリテ篤ト御詮議ノ上重テ御越アルヘシ其上ニテ掃
部助ニモ申聞ヘシト云ヒケレハ善哉坊モ答フルニ辭ナク其後兎角ノ

沙汰ナフシテ和睦終ニ調ヒケル

借屋原滿續
遺書日向記

將軍家ノ命ニ因テ宮崎城ヲ高橋種統ニ反ス事

宮崎城ハ慶長五年十月朔日ニ攻取テ明ル六年八月マデ格護シケルカ
高橋家ニ反スヘキ旨上意トシテ片桐市正ヨリ使者下着シケル且其砌
松浦久兵衛尉ヲ奉行所ニ召サレ其趣申シ渡サレケルニ久兵衛一言ノ
辨解モナクオメトシテ退キケレハ稻津掃部助大ニ怒リ何如ニ將
軍家ノ命ナレハトテ侍ノ槍鋒ニテ伐取シ所ヲオメト敵ニ反スコ
トノ有ヘキヤトテ自ラ上洛シテ掃部助久兵衛ト不和ニナリシハ
此時ヨリノ事ナリト云ヒ傳フ宮崎ノ
義ハ井伊兵部少輔殿内意アリテ黒田如水老ヨリ檢使宮川伴左衛門ヲ
差下サレ内府様ヘ忠節ノ爲ニ幼穉ナカラ左享亮父カ病中ヲモ顧ミヌ
罷下リ一命ヲ捨テ太刀下ニ伐取候フ所ニ御坐候ヘハ今更反シ遣シ候
フハ偏ニ迷惑ノ段頻ニ申シ上ルト雖モ奉行所許容ナク宮崎落城ハ十
月朔日高橋降參ハ其以前九月十五日一本ニ十八
日トアリナレハ前後決斷ノ理

ニ於テハ縦忠節トシテ攻取タル太刀下勳功ノ地タリト雖モ反シ遣ス
ヘキ旨重テ嚴命下リケレハ是非ナク慶長六年辛丑八月矢野侃世肥田
木圖書平川分右衛門尉下城シテ高橋家ニ相渡スサテ宮崎落城ノ後諸
軍ノ手柄逐一吟味アリテ銘々三卷ニ記シ一巻大坂ヘ一巻今一
巻ハ清武ニ留メ置キ宮崎四萬石ノ地ヲ割テソレ賞賜アルヘキ旨
沙汰アリケレハ諸士ハ云フニ及ハス百姓等ニ至ルマテ勇ミ喜ヒ居タ
ル處ニ斯仰セ出サレ一旦ノ勳勞モ忽チ水ノ泡トナリヌレハ國中ノ上
下皆力ヲ落シ將軍家ノ沙汰モアテニナラス黒田如水ノ取持モ頼ミ少
キコトナリトテ恨ヲ含マヌ者ハ無リケル其後如水父子ノ取持ニテ井
伊直政ヘサマク内訴アリケルニ直政申サレケルハ石田カ逆徒或ハ
滅亡シ或ハ降參シテ天下一統内府公ニ從ヒ奉ルト雖モ天下歷々ノ諸
侯十カ川ツ治部少輔カ倭惡ヲ猜ミ一旦公ヘ隨身シタルヤウナレトモ
誠ノ心服ニアラス然ハ此度公ヘ降參シタル諸大名ノ領知ヲ割テ忠功

ノ方へ恩賜アラハ又逆亂ノ端タルヘシ天下ハ一人ノ天下ニ非ス天下ノ天下ナレハ公ノ思食通りニハ成リカタシ先ツ暫ク天下ノ安否ヲ見定メ玉ハン間ハ穩便ノ沙汰タルヘシ左京亮殿幼年ノ身トシテ父ノ重病ヲ見ステ大敵ノ中ニ下向アリテ一命ニカケ類ヲ離レ御味方トシテ無二ノ忠功ヲ立ラレ候フ義ハ御感悅餘リアルコトニ候ヘハ終ニハ御報謝アルヘキナレハ其意ヲ得ラレ是以後トテモ遺恨ナク專ラ勇義ヲ勵サレ候フ義肝要タルヘキ旨密々示レ諭サレケレハ其旨ヲ承ケ恨ナステ、奉公丹誠ヲ盡サレケル

宮崎軍記故老ノ話松井義彰覺書稻津重房勳功記

稻津掃部助黑田如水ノ指圖ヲ用サル事

稻津掃部助ハ宮崎城ヲ空ク高橋家ニ反シヌルコト殘念骨髓ニ徹シテ思ヒケルハ其後モ度々黑田如水ニ歎キ訴ヘケルニ如水モ一旦檢使マテ差下サレ内下知アリテ取シメラレシ所ナレハ種々ト思慮ヲ運サレ東禪公在府ノ砌掃部助ニ内々申シ含メラレケルハ本多佐渡守ニ兼テ

内談致シ置候フ間九州ノ大名暇ヲ賜ハリ歸國ユレアリ候フトモ左京亮殿ヲハ江戸ニ殘シ置將軍家ノ小姓奉公勤サセ參ラセヨトナリ掃部助畏テ候フトハ申シタレトモ心ニ思フヤウ武士ノ槍鋒ニテ伐取タル城地サヘ空ク敵ニ反ス位ノ事ナレハ如水ノ指圖モ頼ミ少シ所詮歸國然ルヘントテ直ニ供奉シテ罷下リケレハ如水大ニ怒リ掃部助ハ武功ノ者ナレハ槍カタクケントモ以來江戸ニ召具セラル、コトハ然ルヘカラストナリ母公松壽夫人兼テ掃部助ヲ憎マル、事ノアリケル折ナレハ如水ノ一言ヨリ猶又深ク憎マレ竟ニ誅戮ノ資ト成ニケル其後掃部助ハ伏見ニテ稻津因幡守ト談合ノ上加藤清正ニ參リ宮崎一戰ノ根元並ニ宮崎ヲ空ク高橋ニ反セシコト殘念ノ趣且左京亮幼年ニ候フ間萬端御指圖頼ミ奉ル由申シ入ケルニ主計頭領承シテ聊カ疎略アルマシキ旨申シ渡サレ且衣服ナト與ヘラレ懇ナリシ事トモナリ

下翁日向記稻津重房武功畧

稻津掃部助公麻ノ馬ヲ借ル附阿萬三平長倉三吉ヲ殺ス事

稻津掃部助カ權威ハ日ニ添テ盛ナリケレハ猜ミ嫉ム者多カリケル中ニ又一ツ讒者ノ口ニカ、ル事ノ出來タルコソ歎カハシ其ハ何如ナル事ソト云フニ東禪公ノ秘藏セラレシ名馬ノアリケルカ宮崎合戦ノ初ニ掃部助右ノ馬拜領仕リタシト願ヒシカトモ惜ミテ與ヘラレヌ然ラハ暫時借シ玉ヘ合戦畢ラハ頓テ反シ奉ラント申シケルニソコトヲ得ス借シ遣サレケリ然ルニ合戦畢テ後ニモ猶返上ノ色見エサリケレハ公ハ幼年ニテ何ノ思慮ニモ及ス近習ノ士長倉三吉ヲ清武ニ遣サレ宮崎落城ヲ祝セラレシ序ニ件ノ馬ヲ催促アリ掃部助立腹シテ世上物騒ノ折柄我斯一方ノ城代ヲ仰セ付ラレ先懸テ仕ルコトナレハ用ニ立ヘキ馬アラハ幾匹モ賜ハルベキニ預ケ置ル、馬ノ御催促ハ何事ソヤ主君ハ幼年ニテ御心ノ付セラレヌモ理ナリ何ソヤ其方幼君ノ側ニ居テ斯様ノ御使ヲ勤ルコソ不届ナリト暴ラカニ罵リケル三吉聞テ腹ヲ

立テ身不肖ナレトモ主君ノ使ナリ我ヲ惡口スルハ主君ニ惡口スルニ同シ覺悟セヨトテ脇指拔テ斬カクレハ掃部助ハ其座ヲ起テ奥ノ一間ニ驅入リ急ニ扉ヲ閉タリケル三吉追カケテ後ヨリ斬ツケシカトモ扉破レタルマテニテ掃部助ハ恙ナシ掃部助カ家來阿萬三平此物音ニ驚キ驅來リケルカ此體ヲ見テ即坐ニ三吉ヲ打留ケリ掃部助カ下知セシコトニハアラテトモ其後三平ヲ其マ、差置テ何ノ咎メモ申レ付サリケレハ諸人モ益日ヲ側テ掃部助ハ主君ノ使ヲ殺セリ謀反ノ志アルナト風評セリト翁日向記

稻津掃部助誅セラル、事

慶長七年壬寅伏見城經營アリテ當家ニモ手傳ヒノ命ヲ蒙ラレケレハ同年六月稻津掃部助普請夫六百人ヲ引具シテ上洛シケルカ程ナク普請モ成就シテ同年八月普請夫ハ悉ク下着セリ掃部助ハ九月二十九日下着シケルカ直ニ飢肥ヘ差越テ普請成就ノ由ヲ言上シ十月朔清武ニ

歸ル其頃掃部助カ權威肩ヲ並フル者無リシカハ嫉ミ惡ム輩多シト雖
モ是マテハ敢テ指サス者ナカリシカ今度伏見上リノ留守中ニ松浦久
兵衛尉長倉戎祐山田匡得密談ノ上松壽夫人ニ申シ上シカハ夫人兼テ
深ク憎セラレシ事ノ有ケルニソ速ニ誅戮アルヘシトテ掃部助カ罪狀
七个條ヲ記シテ下サレケル其文ニ曰ク

- 一 豐後守様任御日懸能老名敷衆談合無申事候傍輩惡敷様申成或ハ
腹ヲ切セ或ハ追出一人ニテ家中ヲ損シ候是不見分ニテ候修理大
夫殿ヲモ又我儘ニ申候事家ノ爲ニ非ス候其外違多候
- 一 三吉事官崎ノ城乘取候ツル爲悦被遣候所ニ辱トハ存シ候ハテ剩
ヘ手ツカラ打果候主ノ使テ斯様ニ行ヒ候モノニテ候哉昔ニモ例
少ク覺ヘ候三吉事者修理殿二歳ノ時ヨリ日夜奉公申シ候後ニハ
人ニモ成候トコソ思候是題目ノ違ニテ候
- 一 家中ノ衆若候而役ニモ立程ノ人ヲハ我カ側ニ置修理殿ニハ一向

不宛付候是モ分別違ニテ候

- 一 新參者ニハ知行過分ニ遣シ年比ノ人ニハ大形ニ候事是皆我カ爲ニ
テ修理殿爲ニハ不成候
- 一 此度上方ニテ物毎ニ公義違ヒ多候行家ノ爲ニ成間敷候
- 一 豐後様ヘ高麗ニテ我身惡ク申成候故御歸候テ表住居召候テ外聞
惡敷終ニ御果候于今恨言天山ニ候
- 一 藏納ノ事我儘ニ申候故修理殿手前不辨候事此外條々違多候ヘト
モ先々書留候者也以上

東禪公披見アリテ彌誅セラルヘキニ定リヌ掃部助之ヲ聞テ理不盡ノ
君命從フヘキニ非ストテ同月十二日俄ニ諸士ノ人質ヲ取テ清武城ニ
楯籠リケレハ清武ノ諸士具足ヲ着シ火繩ニ火ヲツケ我モ我モト馳集
ル借屋原甚右衛門尉滿鎮遺書ヲ按スルニ初メ報恩公掃部助ヲ清武城代ト
ニ付ラレ何事ニヨラス存寄ノ事アラハ異見ヲ加ヘ申スヘシ萬一少コテモ遠
慮シタルコトアラハ曲事ニ處セラルヘキ旨申付ラレケレハ甚右衛門等畏リ

其後心付ノ儀ハ度々掃部助ヲ諫メケルニ
掃部助モ能ク二人ノ言ヲ受容ケルトナリ
候フトモ中途ニ罷リ出説言申シ上候フコソ本意ナルニ敵味方ノヤウ
ニ立分レ候フハ何事ソヤトテ其ヨリ掃部助ニ向ヒ先ツ使者ヲ飲肥表
ニ遣サレ此度ノ儀傍輩間ノ遺恨ナル歟又ハ上意ニ出シコトナル歟
ニ聞届ケラレ彌上意ニ出シコトナラハ籠城ノ用意ヲ止メラレ士分定
式ノ切腹當然タルヘシ左モナクテ主君ニ弓ヲ彎レンコト第一先君
公ノ御面皮ニカ、リ鄰國ノ聞エモ何如ナリ同クハ謝罪申上ラレ御承
引サヘアルナラハ浪人ハ士ノ習ヒナレハ身ヲ退カレンコソ然ルヘケ
レト申ケレハ掃部助涙ヲ流シ甚右衛門諫言尤ニハ候ヘトモ人夫ハア
ラジ子ハ持ス銀子ハ少モコレナク唯一人浪人致シ候フテモ朝鮮陣以
來諸大名ニ顔ヲ見識レ候ヘハ見苦キ體ニテハ先君ノ御面皮ニモカ、
リ申スヘク候ヘハ腹ヲ屠ルヨリ外アラシ甚右衛門意見承リ候ヘハ心
弱クナリ候フ間以來ハ曾テ以テ承ルマシト思ヒキツタル體ナレハ甚

右衛門壹岐分左衛門尉ヲ招キ此上ハ貴殿ナラテハ掃部助ヲ諫ル者ア
ルマシ何トソ工夫シテ異見ヲ加ヘラレヨト云フ
壹岐家譜借屋原遠番ヲ按スルニ分左衛門ハ都
於郡沒落ノ時十二歳ナルカ其後佐土原侯ニ事フ佐土原侯關原戰死ノ後ハ嶋
津義弘ニ事ヘ鹿嶋ニ住居ケルカ掃部助其材幹ナルヲ知テ兩度マテ人ヲ遣
シ知行五百石ノ約東コテ迎ヒ船ヲ遣シケレハ異議ナク歸リ來レ爾處ニ間モ
ナク掃部助誅セラレケレハ其ヨリ暫ク有ツク所ナカリシ甚右衛門取持ニ
テ召抱ヘラレシ由見ユタリ左レハ此時薩摩ヨリ分左衛門尉心得タリト
歸リ來リ砌ニテ掃部助ノ許ニアリシナルヘシ
テ度々異見ヲ加ヘケレハ掃部助領承シテ乃テ甚右衛門ヲ呼テ成程貴
殿申サル、通り累代ノ主君ニ向ヒ弓ヲ彎コト本意ニ非ス何トソ貴殿
飲肥ニ差越松浦久兵衛ニ參リ謝罪申上玉ハレカシ其趣意ハ我一人浪
人致シ見苦キ體ニテハ先君ノ御面皮ニモカ、リ申スヘケレハ乘船一
艘臺所船一艘馬船一艘武具一通下シ賜ハルニ於テハ浪人仕城ヲ開ケ
申スヘシ萬一此事御許容ナキニ於テハ浪人得仕ルマシ此段久兵衛ニ
取成頼入ル由申シケレハ甚右衛門乃テ飲肥ニ赴キ久兵衛ニ申シ入ケ
ルニ久兵衛納得ニテ公ニ言上ス
故老ノ説ニ宮崎ヲ高橋ニ還セル一條ヨリ久兵衛掃部助ト不和トナレケレハ掃

部助ノ誅セラレハ久兵衛ノ讒言ナリト云傳フ 公云掃部助浪人シテ加藤
若然ルトキハ此納得モ恐クハ本心ノ納得ニ非ス
主計頭ナトニ參リ京大阪ノ往來ニテ證ノ鼻ニカケ慮外仕ルマシキモ
ノニ非ス候ヘハ腹ヲ屠セ候ハテハ協ハサル旨命セラレ 俊良謂此時公年
斷アルヘキニ非ス且萬ノ政務曾久兵衛等カ裁判 才ニ十四未ク獨
ナレハ此命モ恐クハ久兵衛カ編織セシナルヘシ 甚右衛門モ此上ハスヘキ
ヤウナク久兵衛ニ向テ此度清武ノ諸士籠城シタルハ上意トモ又傍輩
間ノ遺恨トモ辨ヘサル故ナリサレハ先御直書ヲ賜ハリ腹ヲ屠ルヘキ
旨命セラレ候ハ、忠義ノ士ハ自カラ退散スヘシト申シケレハ同十四
日直書ヲ賜ハリテ速ニ切腹スヘキ旨達セララル其文ニ曰
依重罪切腹可仕由度々申付候處運々慮外之事候豊州被懸御目候
事無其隱儀候預置城ニ楯籠延時日無科者ニ氣遣懸候事言語道斷急
度一人罷出切腹可仕事侍之可爲本意候恐々謹言

十月十四日

祐應直判

稻津掃部助殿

掃部助右ノ直書ヲ押戴キ拜見畢テ涙ヲ流シ叔々腹ヲ屠テ奉公セヨト
辱キ君命ナリト申シケル斯リシカハ清武城中ニ楯籠レル諸士ナシカ
ハ以テ累代ノ主君ニ背クヘキ皆夜ニ紛レテ落失ケレハ掃部助手勢ハ
カリソ殘リケルサレトモ掃部助固ヨリ其罪ニ服セサルコトナレハ速
ニ屠腹スヘキ體見エス縱ヒ味方落失テ一人ニナルトテモ一軍シテ見
セントツ罵リケル是ニ由テ同十八日大勢押寄攻入ケルニソ掃部助手
ノ者共ニ之ヲ防カセ其隙ニ屠腹セリ時ニ年二十九ナリ此時掃部助ト
同ク腹屠テ死シタル人々ニハ稻津左右衛門黒木十兵衛吉田權内平賀
六助横山彦助津川茂右衛門須田五郎助井野小助廣瀬與三切通伴右衛
門阿萬三平都合十一人ナリ中ニモ三平ハ聞フル剛ノ者ナリケレハ寄
手ノ勢亂レ入ルマテ少モ臆セス驅廻テ戦ヒケルカ迪モ協ハヌ際ニナ
リシカハ掃部助ノ妻ヲ始メ召使ノ女共六人ヲ手ニカケテ殺害シ其身
モ腹搔切テ失ニケル寄手ノ中ニモ一番ニ進テ打死セシ輩ニハ湯地治

部少輔金丸助作後藤刑部左衛門尉中村藤七兵衛尉川崎勝兵衛尉荒武
清兵衛尉右松市左衛門尉故老ノ話ニ市左衛門尉ハ掃部助カ圓基ノ友ナ
テ市左衛門尉城中ニ入ントスルニ門已ニ閉タリケレハ其期ニ及
處テ阿萬三平其トハ知ス鐵砲ヲ以テ打落セリト未ク然ヤ否ヲ審ニセス姑ク
存録シテ遺聞ニ備フ日向記ニハ市左衛門尉深手ニテ十一月七日死スト云伊集院彌右衛門尉都合八人ナリ掃
部助方ニ取置シ諸士ノ人質ハ猶過半城中ニ残り居タリケルカ矢野侃
世ニ託ソ之ヲ守護セシム侃世老功ノ士ナレハサアラヌ體ニテ警固ヲ
ナス阿萬三平折々來テ人質ハ落失ハ致サヌカ侃世何如ニト尋レハ侃
世答テ御心安カレ一人モ落失候ハストテ終夜篝火ヲ燃テ居タリシカ
寄手ノ勢大手ノ門ヲ乘入ル比侃世後見シテ一人モ殘ラス落シケルト
ソ掃部助ノ弟牛之助ハ明ル慶長八年七月十三日飢肥ニ於テ死ヲ賜ハ
リケル日向記借屋原滿鎮遺書松井義彰年代記○日向記ニハ
牛之助居腹掃部助ト同時ナリトス今年代記ニ從フ
私史氏曰重政當疆場倥偬之日鞠躬竭力有大勳勞於家國而不免夷戮
余竊憫之然重政立幼君之朝而逞宸主之威亦非無可議駿馬君之乘也

而假而弗反三吉君之使也而擅殺之又不可問其殺之者之罪此讒之所由
入重政有自取之也抑余又竊悲嚮也我君臣流離于外今僅創中興之業
宜共協心力保護社稷便相讒閱以壞其長城不獨一人不幸實亦國家之
不幸也

稻津掃部助ノ妻義烈ノ事

稻津掃部助ノ妻ハ本豊後大友家ノ一族田北相模守ノ女ニテ任世政成
ノ妹ナリ田北系圖ヲ案スルニ掃部助誅セラル時政成年十六ナリ而ノ慶長
此女モ已ニ掃部助ニ嫁スル年齡ナレハ大方十四五ナルヘ
二年大友家滅亡ノ時政成年十一ニテ母妹ト共ニ周防國柳井ト云フ所
ニ漂流セリ母ハ土佐一條阿波守房基ノ女ニテ於喜多夫人義益公トハ
與方
兄弟松壽夫人ノ爲ニハ伯母ナリケレハ周防國ニ漂泊ノ由ヲ聞テ松壽
夫人ヲサト使テ周防國ニ遣サレ母子共ニ招カレケル其頃川崎大膳亮
祐賢妻ヲ喪フテ獨居ノ砌ナレハ此母ヲ娶テ後妻トセリ其時此女子モ
母ニ從テ大膳亮ノ養女トナリ乃テ掃部助ニ嫁シケル田北系圖略記程ナク

掃部助誅セラルヘキニ定リケレハ川崎氏ヨリ母ノ病氣ナリ歸リ來レ
トテ迎ヒノ人ヲ遣シケルニ妻ハ實病ナリト思ヒ取急キ飢肥ニ歸ル處
ニ山假屋ニ至リシ時迎ヒノ者實ヲ以テ告ケレハ妻ハ聞テ大ニ驚キ且
哭キ迎ヒノ者ニ向ヒ吾ハ此ヨリ再ヒ夫ノ許ニ還ルナレハ轎ヲ反セト
云フ若黨等肯テ同意セス是非ニ母ノ許ニ伴ヒ歸ントス妻大ニ怒リ薙
刀ノ鞘ヲハツシ吾カ下知ニ從ハサル者ハ皆斬テステント罵リケルニ
ソ若黨等スヘキ様ナク轎ヲカヘシテ清武ニ還リタル故老ノ話掃部助女ノ
事ナレハ母ノ許ニ歸レカシト勸メシカトモ承引セス申シケルハ我女
トハ生レヌレトモ夫ノ最後ヲ見ステ、歸ル存念候ハストテ少モ怖レ
ス今日ユソ打手ノ勢押寄ルト聞エケレハ心靜ニ身糲シテ掃部助ニ附
添ヒ最後ノ體何如ニモ勇ケナリケル之ヲ聞人袖ヲシボラヌ者ハ無リ
ケリ日向記
安井息軒翁曰淫奔薄惡之世乃有此烈婦信乎秉彝之不可得而滅也

稻津因幡守飢肥ヲ去ル事

稻津因幡守重信ハ掃部助ノ伯父ナリ稻津重房勳功記ニハ掃部助ノ養父ナリト云ヘリ永祿十一
年ヨリ天正五年マテ十年ノ間ハ報恩公ノ介副トシテ采地九町ヲ領シ
飢肥ノ城ニ住居セシカ都於郡沒落ノ後ハ暫ク亡命ノ身トナリ報恩公
再ヒ飢肥拜領アルニ及テ紫波洲崎地頭トナル然ルニ今度掃部助誅戮
ノ時重信ニハ一言ノシラセモ無リケレハ重信恚ンテ云縱ヒ我子ヲ誅
戮セラルトモ累代ノ主君ノ爲ナラハ争テカ私恩ヲ存センヤ然ルニ
今甥ナル掃部助ヲ誅セラルトモ一言ノシラセモナキハ是我ヲ疑ヒ玉
フナリ家ノ老臣タラン者斯疑ハレテハ奉公ナリカタシトテ身ノ暇ヲ
願ヒ君命ノ下ルヲ待スシテ紫波洲崎城ヲ立出テ大阪ニ往テ住居セリ

日向記稻津重房武功略記

東禪公大阪ニ上ル黒田長政教訓ノ事

慶長八年癸卯正月東禪公ハ一族ノ人々母公松壽夫人妹阿仙十四歲同阿留守十二歲弟次郎祐壽四歲伯母

高城等ナリ此高城ハ三位公ノ女肝屬省鈞ヲ引具シテ上洛アリ船中佐賀關ヨリニ嫁ス肝屬家滅亡ノ後伊東家ニ復歸ス
松浦久兵衛尉平川分右衛門尉借屋原甚右衛門尉三人ヲ筑前國博多ヘ遣サレ去年稻津掃部助一變ニ付家中ノ制度並萬ツ算用ノ目錄ヲ黑田如水ノ一見ニ備ヘシメラル萬事其指圖ヲ受テ程ナク三人ハ後ヨリ上洛ス同年四月初メ黑田甲斐守長政モ江戸ヨリ上洛アリケレハ京都ニ於テ件ノ目錄等ヲ差出サレ萬事ノ指圖ヲ頼マセラレケルニ長政ヨリ十一个條ノ教訓書アリ其文ニ曰

- 一 二日ニ一度御定メ候テ御目見登城可有事
- 一 節々御上京御無用候事
- 一 御小姓穉キ衆ノ側ニ御入候儀御無用ノ事節々御付合モ不入事
- 一 内證太郎右衛門申聞候儀可被聞召事
- 一 爲年寄東紀學校其外何モ御六カ敷候共御宿老衆トハ細々御參會尤ニ候事

- 一 爰元ニ大勢ノ人被置候儀不入事
- 一 船等ノ儀ハ拙者留守居ノ者ニ申付置候之間伏見ヘノ御上下可被仰付事
- 一 御貯之儀ハ日記銘々被成候テ如水頓ヲ被罷上候間御談合可被成事
- 一 上ノ儀アタニモ思食候ハ、御罰御當候ハント我等ハ存寄候事
- 一 御家中ノ者御成敗ノ儀ハ我等御談合可有候率爾被仰付間敷事
- 一 二十ヨリ内諸事御心ノ儘候テハ人ニ御成有間敷ト存候間晝夜御心遣肝要ニ存候以上

卯月二十日

黑田甲斐守

伊東修理様

飢肥藩三タヒ檢地ノ事

去ヌル文祿元年壬辰領内ノ田地檢地アリテ高三萬六千石ニ定ムト雖

モ報恩公猶以テ軍功ノ爲難キヲ患ヒサセラレ同四年密々檢地ノ沙汰
アリシ處僅カ四萬五百石ニ過ス目的ノ高ニ滿サリケレハ先ツ隱密ニ
シテ閣カレケルニ報恩公卒去ノ後落合九右衛門尉山縣太郎右衛門尉
兩人談合ノ上伏見ニ於テ高六萬石ノ旨披露ニ及ヘリ國ナル家老ナト
之ヲ聞テ大ニ驚キ萬一國易等ノ沙汰コレアルトキハ引渡スヘキ帳面
ナシ急キ檢地セシメ高揚ヨリ外手段ナシト評議ノ上川崎主水三谷作
右衛門尉平川分右衛門尉三人ヲ奉行トシテ慶長九年甲辰三度目檢地
アリケルニ五萬七千八十石餘ノ高トナリケレハ明ル十年乙巳三月平
川分右衛門尉檢地帳ヲ伏見ニ持參シテ奉行所ニ披露セリ日向記松井
義彰年代記
私史氏曰檢地之事其不可已歟國之所以衰弱實由此也初報恩公之封
飲肥也裁有田二萬八千石今五萬千石乃所檢田而得耳蓋初一檢而得
三萬六千石再檢而得四萬五百石三檢而得五萬七千石其六千石分與
二支族故今只
有五萬
千石餘所得益多而民愈窮民愈窮而國愈衰弱然功利之臣必日不如此

則賦不多也國不强也而不知其本之枯也悲夫

稻津九郎兵衛飲肥ヲ去テ加藤清正ニ仕ル事

稻津九郎兵衛重房ハ因幡守重信ノ子ナルカ重信飲肥ヲ立退シ後ハ何

トナク快々トシテ不快ノ月日ヲ送リケルニ重房武一日又大内八郎右
功畧記

衛門尉眞信ト着座ノ先後ヲ爭ヒ議論ニ及ヘシ東禪公評議ノ上眞信ヲ

先トセラレケレハ重房益不平ノ心ヲ懷キ稻津終ニ飲肥ヲ立退ントス
家譜

ルノ心アリ父因幡守大阪ニ在テ之ヲ聞キ急キ肥後ニ下リ仔細ヲノヘ

加藤清正ニ頼ミケルニ清正快ク領承アリケレハ重房武
功畧記慶長十三年

重房法華嶽參詣ノ暇ヲ願ヒ何トナク飲肥ヲ立出ル其時召具シタルニ

人ノ若黨アリケルカ宮崎郡ノ内小松村ニ至リシ時重房初テ出奔ノ仔

細ヲ告知セ且云ヤウ汝等我ニ從ハント思フ者ハ何國マテモ召列ルヘ

シ又否ト思フ者ハ此ヨリ暇ヲ遣ハスナレハ心次第ニ致スヘシトナリ時

ニ一人ノ若黨ハ何國マテモ隨從仕ント云ケルカ一人ノ若黨ハ某モ同

ク隨從仕ルヘキナレトモ家ニ老母ノ候ヘハ介抱仕リタシ何トソ此ヨ
リ暇ヲ賜ハレカシト云フ辭ノ下ヨリ重房刀ヲ拔テ打果シ其マ、立去
リケル 故老ノ話○俊良謂重房カ若黨ヲ殺セル事記録ニ見ユス唯故老傳
ル所此ノ如シ若シ果シテ傳ル所ノ如クナレハ不仁ノ舉動ナリ然
トモ是實ニ已ムコトヲ得ヌ口ヲ消シテ追手ノ難ヲ免フ爲ノ事ト見ユレハ韓信
カ樵夫ヲ殺セル志ナルヘシ○又故老ノ話ニ晉カ藩士夫婦同行ニテ爾外ニ出
ルコトヲ許サレヌハ此時重房妻
ヲ携テ出タルヨリノ事ナリトソ 其ヨリ肥後ノ加藤家ニ參リケルカ清正
申サレケルハ左京亮殿幼年ニシテ領地小分ナルニ出奔ノ者ヲ我等召抱
ヘ候フテハ左京亮殿ヲ輕蔑スルニ似タリ暫ク對面スヘカラス先蘆北郡
ニ隱レ居ルヘシトテ加藤大和ニ預ケラレ浪人堪忍分トシテ五十人扶
持ニ現米五百石ヲ與ヘラレ佐敷ノ山中ニ住居セシメラル然ルニ其後
三年ヲ經テ慶長十六年六月清正卒去アリテ其子忠廣ノ代ト成寛永十
年罪アリテ奥州ニ配流セラル此時東禪公將軍家ノ命ヲ蒙リ熊本城在
番トシテ肥後ニ赴カル公初メノ程ハ幼年ニテ何ノ仔細モ辨ヘラレサ
リシカ稻津代々ノ勳勞殊ニ去ヌル慶長五年庚子ノ亂ニ重房カ大阪邸

ヨリ竊ミ出シ參ラセシ拔群ノ奉公ヲ思ハセラレ歸藩ノ初重房カ子一
人ヲ飫肥ニ召具セラルヘキ旨申達セラレシカトモ重房心ニ快カラス
思ヒケルコトノ有ケルニヤ固ク辭レテ從ハス其後細川越中守忠利肥
後國拜領アリテ豊前國小倉ヨリ熊本ニ遷ラレケル重房浪人ノ身ナレ
ハ已ニ川尻マテ立退シカ越中守兼テ其名ヲ聞及ハレケルニヤ畑忠庵
ト云フ儒者ヲ使トシテ川尻ニ遣サレ種々懇ナルコトナリケレハ終ニ
其意ニ應シテ細川家ニ仕ヘケル忠利即座ニ知行千石ヲ與ヘラレ又嫡
男麻之助ニハ別ニ三百石ヲ賜ハリケル 重房武
功略記
公子祐久京都小幡宗以カ家ニテ誕生ノ事
公子祐久ノ腹ハ阿伊麻トテ薩州都城ノ土佐藤隆勝カ胤ナリ初メ天正
五年日向沒落ノ時門川四郎左衛門尉祐並ハ高岡ノ現本寺ニテ佐藤隆
勝ニ取卷レ打死セリ其時祐並ノ妻ハ隆勝ニ生捕レケルカ隆勝其容儀
ノ美キヲ見テ奪テ己カ妻トセリ程ナク懐胎シテ女子ヲ生ム是即テ阿

伊麻ナリ其後妻ハ阿伊麻ヲ携ヘテ飢肥ニ逃來リ益安村ノ内宇土ト云
 フ所ニ隱レ居タリ門川其頃小田原彌右衛門平川為泉覺書ニ阿伊麻ノ繼
 次郎兵衛父彌右衛門トアリ一本ニハ
 ニ作ル 前妻ヲ喪ヒ餼居ハ砌ナレハ是幸ノ後妻ナリトテ二人ヲ迎ヘ
 テ養ヒ居タルカ隆勝ヨリ尋テ索ルコト頻ナレハ阿伊麻ヲ匿スニ所ナ
 ク後宮奉公ニサシ出シケル處ニ小玉氏東禪公手ヲカケラレテ懐胎セリ
 公年二十阿伊麻二十七 固ヨリ隱密ニテ世ニ弘メラレヌコトナリケレハ
 ナリ事前ニ見エヌリ 阿伊麻ニハ暇ヲ賜ハリテ上洛セシメラル其頃平川分右衛門尉伏見邸
 ノ留守居タリシカ何トソシテ隱密ニ育テアゲ度其旨竊ニ阿喜多夫人
 圓光公ノ奥方ナリ公卒去ノ後京都四條ニ住居 松壽夫人此時江戸邸ニ申シ
 アリ四條様ト云フ即チ松壽夫人ノ母公ナリ 上ケルニ二方共ニ初ノ程ハ猶豫アリシカトモ再應ニ及ンテ許容アリ
 ケレハ分右衛門尉サマト心ヲ運ラシ先ツ阿喜多夫人拾ヒ子ノ
 體ニモテナシ兼テ京都上立賣邊ニ住居セシ小幡宗以ト云フ者宗以カ
久トテ江州小幡村ニ住居ス二人ノ子アリ兄ハ即チ宗以弟ハ宗仙トテ吳服商賣ヲ業トシテ當家ニ出入セリニ密談シテ誕生ノ上ハ

宗以カ家ニテ養育ノ手筋ヲ謀リケルニ宗以夫婦大ニ喜ヒ快ク領承セ
 リ然トモ伊麻暇ヲ賜ハリシ身ナリケレハ一先何方ニカ影ヲ隱シ候ハ
 ントテ分右衛門尉カ工夫ヲ以テ阿伊麻出奔ノ體ニモテナシ夜半竊ニ
 伏見邸ヲ出テ宗以方ニ遣シケル此事分右衛門尉カ腹心和田正右衛門
 等兩三人ヨリ外ニハ知ル人更ニ無リケル頓テ臨月ニ及ヒ慶長十四年
 己酉七月十日ノ朝宗以宅ニテ公子誕生アリ此即チ慈雲公祐ナリ宗以
 ヨリ早速伏見邸ニ注進シタリケレハ分右衛門尉直ニ上洛シテ祝儀ヲ
 上名ヲモ鶴千代ト申シケル其趣江戸松壽夫人ニモ申シ上ケルニ其頃
 夫人一夜ノ夢ニ枝ハ枝生ダシ松ニ藤ソヒテト見ラレケルニゾ鶴千代
 ナ改テ藤松ト名ケラレタリ明ル十五年庚戌三月將軍家ヨリ丹波國普
 請ノ役ヲ命セラレ東禪公上洛ノ時藤松二歳ニ成ラレシテ伏見邸ニ召
 出サレ父子ソアシラヒアリケレハ隱密ノ事初テ露レケル然トモ未タ
 世ニ弘メナケレハ小幡カ宅ニテ成立アリ宗以夫婦心ヲ竭シテ鞠育シ

ケルカ元和六年庚申十二歳ニテ初テ江戸ニ下向アリ傳役ニハ渡邊内
 匠助ヲ附ラレケリ小幡家舊記ニハ藤松君十六歳ノ時マテ御養育申シ上其
 歳初テ江戸ニ下リ玉ヘル由シルセリ今年代記成瀬覺書
 是ヨリ前慶長十七年東禪公ノ妾森本氏ノ腹ニ熊太郎主膳正 誕生
 祐豐
 アリシカトモ藤松ヨリ三歳少ク在シケレハ藤松ヲ以テ嫡嗣ト定メラ
 レケル東禪公年代記平川爲泉
 覺書小幡淺五郎家舊記

日向纂記卷十五終

